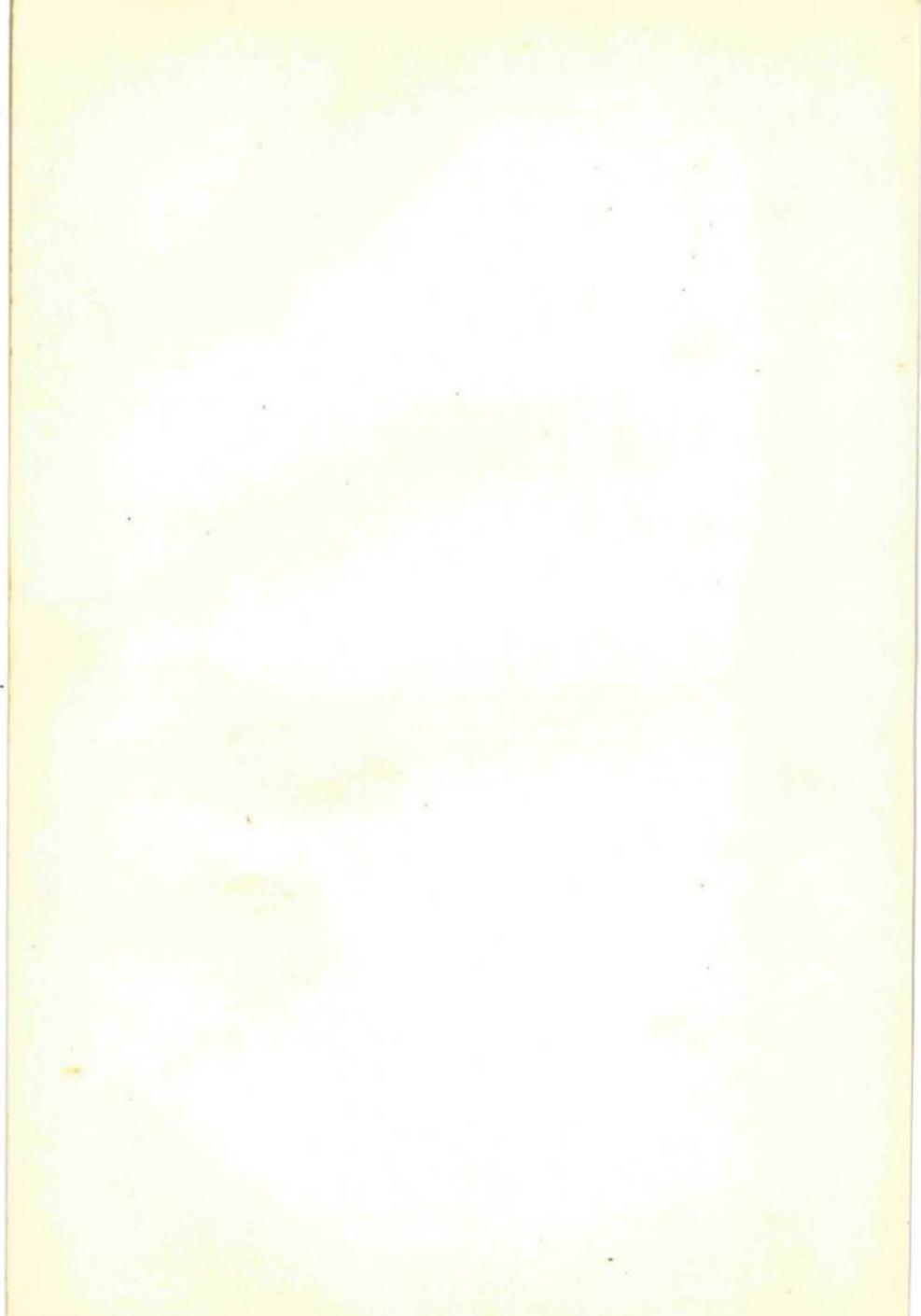


山 下 遺 跡

—昭和58年度市道権現橋通り線道路改良工事に伴う 緊急発掘調査報告書—
—昭和58年度市道北原川村松西線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—

1984. 3

掛川市教育委員会
袋井市教育委員会



山 下 遺 跡

—昭和58年度市道権現橋通り線道路改良工事に伴う 緊急発掘調査報告書—
—昭和58年度市道北原川村松西線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—

1984. 3

掛川市教育委員会
袋井市教育委員会

序 文

最近、古きよき都市の心を思索する機運が、非常に高まっている中で、文化遺産を保護、保存すると共に郷土の風土や歴史、文化を大切にし愛する動きが、各地において一段と高まりをみせていることは、喜ばしいことあります。

また、文化遺産は過去において、人間がさまざまな生活に直接、間接にかかわり、生活環境を形造ってきた歴史的な要素の一つであることは、いうまでもありません。

幸い、掛川市は定住圈構想に基づく生涯学習都市として着実に、力強く発展の歩みを進めており、伝統文化と歴史を大切にしながら開発事業をすすめています。

このような状況の中で、当市においても遺跡が所在する土地は、大方地形的に優れており、それらの遺跡にかかわりなく他の目的のためにも利用されており、また、開発の対象となる場合が多いわけあります。

このたびの発掘調査は、掛川市の道路計画の一環として各和地区から袋井市側へ通じる道路整備と、老朽化した横げたの改修を行なうにあたって事前に実施されたものであります。

道路計画にあたってこの地域一帯には、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が、包蔵されていることが知られており文化財保護法の立場から埋蔵文化財を極力さける方向で選定されたのであります。が、道路計画などにより他に変更することができず、この地域に決定されたのであります。

そして、用地内を綿密に踏査したところ弥生時代の遺跡が包蔵されていることが判明したため、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。

調査は、掛川市教育委員会があたり用地内を全面発掘調査した結果、方形周溝墓が多数発見され、当時の墓制あるいは社会を解明するうえでの示唆を得ることができました。

終りにあたり、この調査に多大なご協力をいただいた地元関係者及びご指導をいただいた静岡県教育委員会文化課並びに袋井市側を調査された袋井市教育委員会に対し深く感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解と学術研究の資料として活用されれば誠に幸甚であります。

昭和 59 年 3 月吉日

掛川市教育委員会

教育長 伊藤 昌明

序 文

市道北原川村松西線は、一般国道1号袋井バイパスの関連道路であり、袋井市と掛川市を結ぶ道路として計画された工事であります。昭和57年度に掛川市の工事によって、遺跡の所在が明らかとなり調査に至ったものです。この遺跡の発掘調査報告書が双方の関係者の努力によって刊行できることは誠に喜ばしいことであります。

袋井市としては、当該工事が59年度事業でありますので、58年度中に発掘調査を行うことに致しました。調査員の確保や他遺跡の調査との調整等があり、11月から調査を開始したわけであります。調査では、方形周溝墓、土壇墓、弥生式土器が検出され、中遠でも有数の方形周溝墓群となりました。これによって、当地方での弥生時代の墓制の研究がより深まることだろうと期待しています。

近年の交通機関の発達は、国・県・市道の改良工事をより多くしています。そうした中で、各機関各課との調整が必要であり、遺跡の周知を徹底することも大切であります。開発行為に文化財はどう対応していったらよいのだろうか。設計変更をする必要もありましょうし、やむをえない場合もあるでしょう。発掘調査をし、遺跡が消滅する場合には周到に調査計画を組む必要がありましょう。そうして記録された遺構や遺物は、できるだけ早い時期に公表し活用されなくてはなりません。

人々の価値観は少しずつではありますが、「物」から「心」へと移りつつあります。現代の社会は急速な進展の中で、物質文化が先行し精神文化が後行しています。心の「ゆとり」や「うるおい」は精神文化と物質文化とが調和のとれた社会でしか生まれないように思えます。過去を振り返り未来を志向するためには、精神文化と物質文化とが並行するとともに、地域の文化財が大きな役割を果たすのではないかでしょうか。

ともあれ、寒風吹き荒ぶ中、調査に協力してくださった作業員のみなさん、静岡県教育委員会文化課、掛川市教育委員会の方々にお礼を申し上げる次第です。

袋井市教育委員会
教育長 鈴木勲一

例　　言

1. 本書は、市道権現橋通り線道路改良工事に伴い掛川市埋蔵文化財調査委員会が、市道北原川村松西線道路改良工事に伴い袋井市教育委員会が実施した、山下遺跡発掘調査報告書である。
2. 本調査は、掛川市が昭和58年8月29日から10月31日まで、袋井市が昭和58年11月7日から昭和59年1月23日まで実施した。
3. 本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章	松本一男・前田庄一
第2章	松本一男・前田庄一
第3章	松本一男・前田庄一
第4章	松本一男・前田庄一
第5章	松本一男
第6章第1節	前田庄一
第6章第2節	松井一明（袋井市教育委員会）
第7章	前田庄一
第8章	松井一明
第9章	松本一男
4. 調査・報告書作成にあたり次の御協力をえた。深く感謝いたします。

加藤賢二、川江秀孝、佐藤由起男、篠原修二、柴田稔、鈴木敏則、鈴木敏弘、瀬川裕市郎、中嶋郁夫、平野吾郎、向坂範二、山岸良二、渡辺康弘（敬称略）
5. 調査資料は、掛川市教育委員会、袋井市教育委員会で保管している。
6. 本調査および本書刊行に関する事務は、掛川市教育委員会、袋井市教育委員会が行った。

凡　　例

1. 本書で使用した方形周溝墓の規模は、周溝内の内側下場間の距離である。
2. 方形周溝墓実測図は縮尺80分の1に、周溝内土層断面図は縮尺40分の1に統一した。
3. 土器実測図は縮尺4分の1に、土器拓影図は縮尺3分の1に統一した。
4. 土器調整は図中に記入した。

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	2
第2章 調査にいたる経過	5
第3章 調査の方法・経過・体制	5
第4章 基本層序	6
第5章 掛川市教育委員会の調査	7
第1節 遺構	7
i) 弥生時代の遺構	7
ii) 古墳時代以降の遺構	16
第2節 遺物	18
第3節 まとめ	19
第6章 袋井市教育委員会の調査	23
第1節 遺構	23
i) 弥生時代の遺構	23
ii) 古墳時代以降の遺構	36
第2節 遺物	37
第7章 遺構のまとめ	40
第8章 遺物のまとめ	42
第9章 総括	44

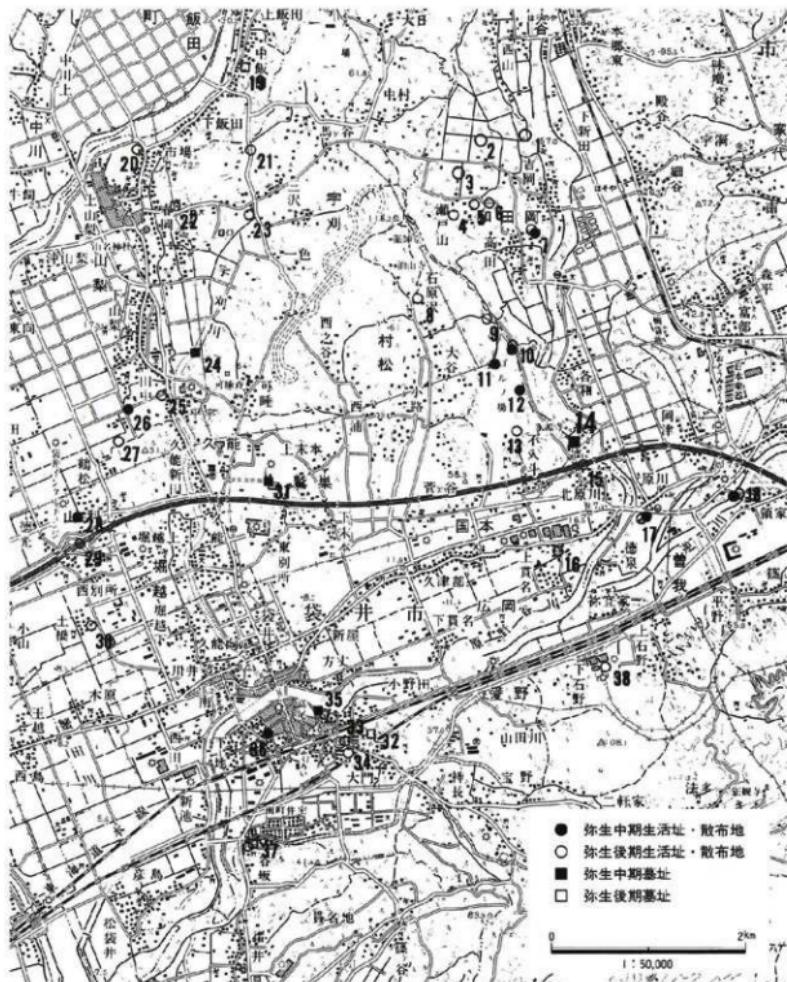
挿 図 目 次

第1図 山下遺跡周辺の遺跡分布図	1
第2図 山下遺跡周辺地形図	2
第3図 山下遺跡発掘調査地全体図	3
第4図 第1号方形周溝墓実測図	8
第5図 第2号方形周溝墓実測図	9
第6図 第3号方形周溝墓実測図	10
第7図 第4号方形周溝墓実測図	11
第8図 第4号方形周溝墓主体部実測図	12
第9図 第4号方形周溝墓周溝土層断面図	12
第10図 第5号方形周溝墓実測図	13
第11図 第6号方形周溝墓実測図	14
第12図 近世土塚墓実測図	17
第13図 出土土器実測図	20
第14図 出土土器拓影図（1）	21
第15図 出土土器拓影図（2）	22

第 16 図	第 8 号方形周溝墓実測図	23
第 17 図	第 9 号方形周溝墓実測図	24
第 18 図	第10号方形周溝墓実測図	24
第 19 図	第11号方形周溝墓実測図	24
第 20 図	第12号方形周溝墓実測図	25
第 21 図	第13号方形周溝墓主体部実測図	26
第 22 図	S D 35 内磯・土器出土状況図	26
第 23 図	第13号方形周溝墓実測図	27
第 24 図	第15号方形周溝墓実測図	28
第 25 図	第14号方形周溝墓実測図	29
第 26 図	S D 10・S D 41土器接合状況図	30
第 27 図	第16号方形周溝墓実測図	31
第 28 図	S D 44・S D 45実測図	32
第 29 図	第1号土坑・第2号土坑実測図	33
第 30 図	第3号土坑～第8号土坑実測図	34
第 31 図	第9号土坑・第10号土坑実測図	35
第 32 図	道路状遺構断面図	36
第 33 図	出土土器実測図	37
第 34 図	出土土器拓影図	38

図 版 目 次

- 図 版 I 遺跡遠景（航空写真）
図 版 II 上 調査区全景調査前（北から）
図 版 II 下 調査区全景完掘状況（北から）
図 版 III 上 第1号・第2号・第11号方形周溝墓完掘状況（北から）
図 版 III 中 第3号方形周溝墓完掘状況（北から）
図 版 III 下 第4号方形周溝墓完掘状況（南から）
図 版 IV 上 第5号方形周溝墓完掘状況（北東から）
図 版 IV 中 第6号方形周溝墓完掘状況（南から）
図 版 IV 下 近世土壤墓
図 版 V 上 第1号方形周溝墓出土土器
図 版 V 中 第4号方形周溝墓出土土器
図 版 V 下 第5号方形周溝墓（左）・第6号方形周溝墓（右）出土土器
図 版 VI 上 第1～3号方形周溝墓出土土器
図 版 VI 中 第4号方形周溝墓出土土器
図 版 VI 下 第4～6号方形周溝墓出土土器
図 版 VII 上 第8号方形周溝墓～第10号方形周溝墓完掘状況（北より）
図 版 VII 中 第13号方形周溝墓完掘状況（北より）
図 版 VII 下 第13号方形周溝墓主体部（東より）
図 版 VIII 上 第14号方形周溝墓完掘状況（南より）
図 版 VIII 中 第15号方形周溝墓・第16号方形周溝墓完掘状況（北より）
図 版 VIII 下 第9号土坑（奥）・第10号土坑（中央）・第11号土坑（手前）完掘状況（北より）
図 版 IX 上 第9号土坑（東より）
図 版 IX 中 第10号土坑（東より）
図 版 IX 下 道路状遺構土層断面
図 版 X 上 方形周溝墓群遠景（北より、奥より12号・13号・14号・15号・16号）
図 版 X 下 出土土器



- | | | | | |
|----------|--------------|----------|--------|--------|
| 1. 吉岡下ノ段 | 9. 石原沢 | 17. 原川 | 25. 川田 | 33. 大門 |
| 2. 中原 | 10. 金鉢原(久野山) | 18. 頭家 | 26. 鶴田 | 34. 大門 |
| 3. 吉岡同 | 11. 東山 | 19. 権信寺 | 27. 鶴田 | 35. 松谷 |
| 4. 漱戸山II | 12. 陣屋 | 20. 稲荷 | 28. 鶴田 | 36. 光輝 |
| 5. 漱戸山I | 13. 清間裏 | 21. 水家掛 | 29. 徳 | 37. 愛 |
| 6. 花の腰 | 14. 山下 | 22. 春岡 | 30. 土谷 | 38. 野向 |
| 7. 女高前 | 15. 字佐八幡境内 | 23. 三澤 | 31. 久能 | |
| 8. 境 | 16. 国本 | 24. 春岡一号 | 32. 薩摩 | |

第1図 山下遺跡周辺の遺跡分布図

第1章 地理的・歴史的環境

山下遺跡は、和田岡原台地の南端、標高35mに位置し、水田面との比高差は約15mを計る。

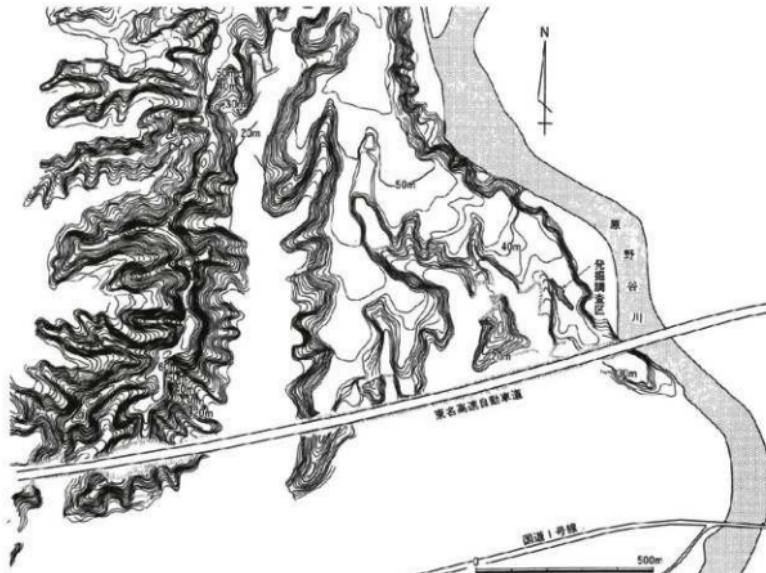
和田岡原台地は、南北4kmにわたり、標高30m～60mを計る比較的平坦な地形となっている。この台地上における弥生時代の遺跡には、中期の瀬戸山Ⅱ遺跡・東山遺跡・陣屋北遺跡、後期の瀬戸山Ⅰ遺跡・女高遺跡・金鉢原遺跡等がある。東山遺跡・女高遺跡・金鉢原遺跡では、堅穴住居址が検出されており、中期～後期にかけての集落が台地上に営まれていたと考えられる。

一方、和田岡原台地周辺の冲積平野では、現在のところ集落址は確認されていない。

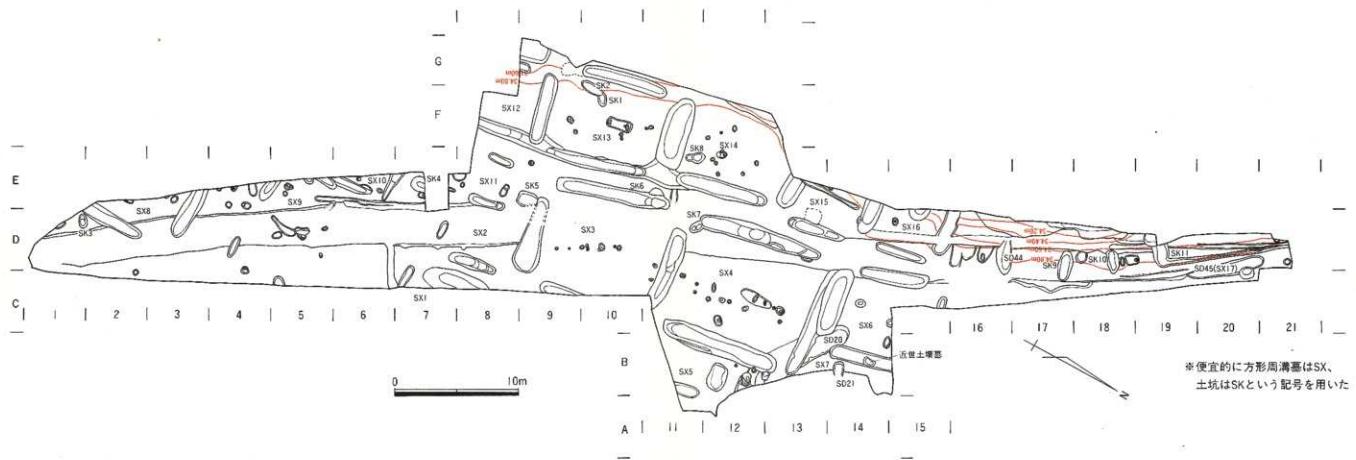
今回の山下遺跡の調査により、弥生時代中期巣田式期と考えられる方形周溝墓群が確認されたが、同時期とされる東山遺跡とは、直線距離にして約1.3km離れている。したがって、本周溝墓群の母体となる集落は、今のところ未発見であるが、冲積平野、または台地上のより近い位置に求められる。

参考文献

- 山村宏他 1977 「静岡カントリークラブ袋井ゴルフ場建設工事への提言」 遠江考古学研究会
袋井市役所 1983 「袋井市史 通史編」
岩井克允他 1982 「金鉢原遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会
岩井克允他 1983 「行人塚遺跡発掘調査概報」 掛川市教育委員会
掛川市教育委員会 1983 「掛川市遺跡地図」



第2図 山下遺跡周辺地形図



第3図 山下遺跡発掘調査地全体図

第2章 調査にいたる経過

山下遺跡の存在が知られるようになったのは古いことではない。昭和54年静岡県教育委員会刊『静岡県遺跡地名表』にはまだその名が見られず、ただ付近に「散布地・宇佐八幡内遺跡（弥生・古墳）」の存在が知られるだけであった。掛川市教育委員会では昭和56年から国・県の補助事業による「市内遺跡分布調査事業」を行い、市内に所在する遺跡の実態調査を始めた。これによって市内のいたる箇所から新たに遺跡が発見された。山下遺跡もこの調査により新発見となった遺跡である。

この最中昭和57年度、当該地区において掛川市役所土木課計画の市道建設が進められ、掛川市教育委員会が駆けつけた時にはすでに遺跡の一部が消滅していた。そして残りの部分について調査するようという掛川市教育委員会の指示に応えるように昭和58年4月、掛川市役所土木課から掛川市教育委員会に調査の依頼があった。同様に当該地区に計画路線をもつ袋井市役所土木課からも袋井市教育委員会に調査の依頼があり、それぞれの市において協定書が交され調査への運びとなった。

また掛川市教育委員会と袋井市教育委員会では、同一遺跡であることから合同発掘をという計画を進めたが、両教育委員会の年間スケジュールがうまく折合わず結果的に時期をずらして調査することになった。しかし、報告書は一本化するという両教育委員会の合意のもと今回報告することになった。

第3章 調査の方法・経過・体制

i) 調査の方法

今回の調査では、発掘予定区域が南北方向に長く延びて計画されていることから、調査グリッド南北列を発掘区南北端に合わせて設定することとした。したがってグリッド南北列の基軸方位は、N-28°38'Wに設定した。また発掘区の一部では、東西方向に幅広く面積をもつことから原点となる杭を図面上で設定し、現地においてそこから復元した形で杭打ちを行った。

調査グリッドは、一辺5mの正方形で発掘区に網目をめぐらすこととした。杭は図上の原点から西方向にA、B、……、Gのアルファベット、北方向に1、2、……、21と付番し、杭の名称を(A-1)杭、(B-2)杭とした。そしてグリッドの名称は、グリッドに対し南東位に位置する杭の名称をそのまま充てることとした。つまり、(B-2)グリッドに立った時、南東位に位置する杭は(B-2)杭となる。

なお、今回の発掘調査は—遺跡を行政区が違うというだけの理由で調査期日・方法を異にして調査するという從来の文化財行政の反省点を省みて、できる限り合同で行うということを目的として行った。年間スケジュールの関係から合同調査には至らなかったが、同一グリッド配置のもとに発掘調査を行い、整理作業上でも連絡を密にして報告書作成を行った。

ii) 調査経過

発掘調査は、掛川市教育委員会が袋井市教育委員会に先立ち、遺物包含層確認を目的としたトレングリッドによる試掘から始まった。調査では、耕作土掘削に関し重機が、包含層及び遺構掘り下げに関し人工がそれぞれを行い、遺構確認・遺物出土状況・完掘等において必要に応じ写真撮影・実測図作成を行った。以下、掛川市教育委員会、袋井教育委員会の順で調査経過をまとめた。

<掛川市教育委員会の調査>

- 8月29日 杭打ち作業・試掘トレンチ掘り作業
30・31日 重機稼動、表土・耕作土掘削
9月1日～14日 各区耕作土・部分的包含層掘削作業、調査区土層観察
16日～30日 調査区南区から精査。7基の方形周溝墓、2群のPit群、近世土壤墓1基確認。
10月3日～15日 遺構掘り下げ。この間各遺構に対し断面観察等を行う。
5日～31日 遺構完掘後、写真撮影・各種実測図作成を行う。これを以て現地作業終了。

<袋井市教育委員会の調査>

- 11月7日～9日 試掘トレンチ掘削・土層観察
10日～12日 重機稼動、表土・耕作土掘削
14日～12月27日 各区掘削。調査区南区から始め、跡時精査・遺構確認・掘り下げを行う。あわせて断面・遺物出土状況を観察、写真撮影・実測図作成を行う。
1月5日～23日 実測図作成、完掘後写真撮影。道路部分の埋め戻しを行い、現地作業を終了。

Ⅲ) 調査体制

今回の発掘調査は、次の体制のもとに行われた。

事業計画機関 掛川市役所土木課 袋井市役所土木課

調査実施機関 掛川市埋蔵文化財調査委員会 袋井市教育委員会

調査指導機関 掛川市教育委員会(掛川市に係わる調査のみ)

調査員 松本一男(掛川市教育委員会) 前田庄一(袋井市教育委員会)

発掘作業員 内田勝義、大滝浩敏、搏松達行、桑原孝之、後藤謙、塙崎克彦、鈴木茂義、田村幸英、椿原靖弘、萩田国夫、宇野祥江、岡山さちよ、岡山とし子、鈴木きり、鈴木辰江、鈴木千代乃、鈴木弘子、長谷川幸子、山本かね子(以上掛川市)
石川一二、川村義雄、三浦政平、三浦久雄、太田清子、鈴木敏子、寺田しま、萩田千代子、三浦とく江、山崎雪江、山本まさ子(以上袋井市)

整理作業員 守屋雅子、渡辺幸弘(以上袋井市)

第4章 基本層序

今回の調査地は、茶園・農道となっていたところで、遺物包含層の残存はほとんど見られなかった。以下、掛川分と袋井分に分け、大略を述べる。

<掛川分>

A区・B区・C区・D区の一部が調査地であった。茶園となっていたところであり、重機を用いた抜根・改植等により、耕作土が深くまで達していた。耕作土の厚さは、C・D-1～6区で約40cm、B・C-11～15区、C-7～17区で40～60cm、C-18～20区では約80cmに達していた。

<袋井分>

D区が農道、丘陵斜面、E区・F区・G区が茶園となっていた。D-1～14区の農道下、20cm～30cmの深さで弥生時代の遺構を検出したが、D-17区付近より北では、弥生時代の遺構確認面までの深さ約70cmを測る。茶園での耕作土の厚さは、約20cm～40cmを測る。D-15～18区は、農道および丘陵斜面となっていたところであり、丘陵斜面の堆積土の厚さは約70cm～1.2mを測る。この農道下に位置する弥生時代の遺構は、土砂の流出により、すでに西端を失っていた。

第5章 掛川市教育委員会の調査

掛川市教育委員会が調査して明らかとなった遺構は、弥生時代の遺構では方形周溝墓7基、古墳時代以降の遺構として柱穴列2群、近世土壇墓1基、その他土壇状掘込みが数基検出確認している。以下の項目で時代毎に内容を述べるがここでは、概略的に触れてみたい。

弥生時代の遺構として方形周溝墓が全部で7基検出した。7基はいずれも四隅に陸橋部をもつ形態をとるもので、方形周溝墓はそのあり方から大きく2群に分けられるようである。主体部を確認できた方形周溝墓は4号方形周溝墓のみで、他ではその残影すら確認できなかった。ただし主体部を確認できた4号方形周溝墓でも掘り方残存のみであり完全な検出ではなかった。遺物はいずれも溝からの出土品で、それによると弥生時代中期嶺田式期に属されるものである。

古墳時代以降の遺構としては全体的に明確でなく、3号方形周溝墓方台部上に位置する柱穴列、4号方形周溝墓方台部上に位置する柱穴列、そして6号方形周溝墓溝S D19を切り込む近世土壇墓1基、6号方形周溝墓方台部上に位置する土壇状掘込み等が確認された。近世土壇墓以外のものは覆土中からの出土遺物もなく時期不明と言わざるを得ない状況にある。ただ遺構確認面上層の耕作土中からは土師器及び須恵器壺の宝珠状つまみが出土していることから奈良から平安期にかけて構築した可能性があることをつけくわえておく。

今回の調査で確認できたことは上述したとおりで、以下つづいて遺構・遺物の順で記述していく。

第1節 遺構

1. 弥生時代

弥生時代の遺構として確認したものに方形周溝墓7基がある。これらはすべて四隅が切れ、陸橋部を有している。7基の方形周溝墓は、溝の共有・切合い関係、長軸方位（確認した方形周溝墓はどれも方台部形態が長方形を呈しており、便宜的であるが南北位に位置する溝を二等分する位置で方位を測った）の関係から大きく2群に分けられよう。つまり2号・3号・4号・6号の各方形周溝墓群（袋井市検出の11号方形周溝墓も同一群に含められる）と、1号・5号の各方形周溝墓群という具合である。しかし4号方形周溝墓溝S D11と6号方形周溝墓溝S D16との切合い関係が明白であること、7号方形周溝墓溝S D21の方向が他の方形周溝墓と異なっていること等を考え合せると4群構成とも考えられる。

そして、周溝墓の築造時期については、第13図～第15図に示したとおり、従来呼称されている嶺田式期に属されてくるものと思われる。

次に各方形周溝墓毎に述べていくことにする。

第1号方形周溝墓

1号方形周溝墓は、2号等と別群構成するものである。検出位置はC・D-7・8グリッドに位置するもので2号方形周溝墓のすぐ東側に構築されている。方台部全貌が明らかでないがS D 2の長軸方位とS D 1との配置関係から、方台部の長軸方位はN-5°30'-Wに向く方形周溝墓であることが推測される。方台部の規模は、周溝S D 1、S D 2について部分的な検出であって明確でない。南側

溝SD1は幅56cm×長さ不明×深さ14cm、西側溝SD2は幅2m×長さ不明×深さ27cmの規模が推測される。ただし深さからもわかるように、付近では耕作が深くまで進んでおり規模もかなり形を変えていることが知られるものである。溝覆土は、大きく2層に分層され上層に黒色土、下層に黒褐色土（礫含有、湿氣有）で構成されている。出土遺物は第13図1に示した完形土器がSD2の北側寄り下層面から出土している。この完形土器の出土状況から、これが1号方形周溝墓の時期を知る上で有力な資料となるものである。

第2号方形周溝墓

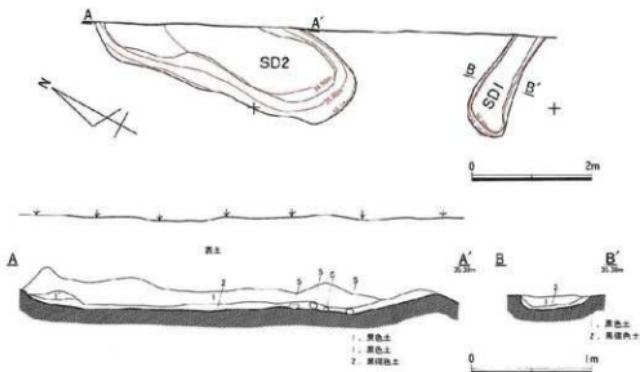
2号方形周溝墓は、3号・4号と同一群に属する方形周溝墓である。D・E-7~9グリッドに位置し、北側溝SD5を3号と共有する。ただし、ここで共有と表現したが厳密に言うならば、第5回土層観察によって明確でないが、平面形から察し切合い関係であることも考えられる。また西側溝SD4は11号方形周溝墓と共有するものである。

方台部の大きさは、南北長6m×東西長4m34cmを測り、方台部上は現在の農道により削平されており形状不明である。また主体部についても検出できなかった。長軸方位は、N-6°30'Wである。

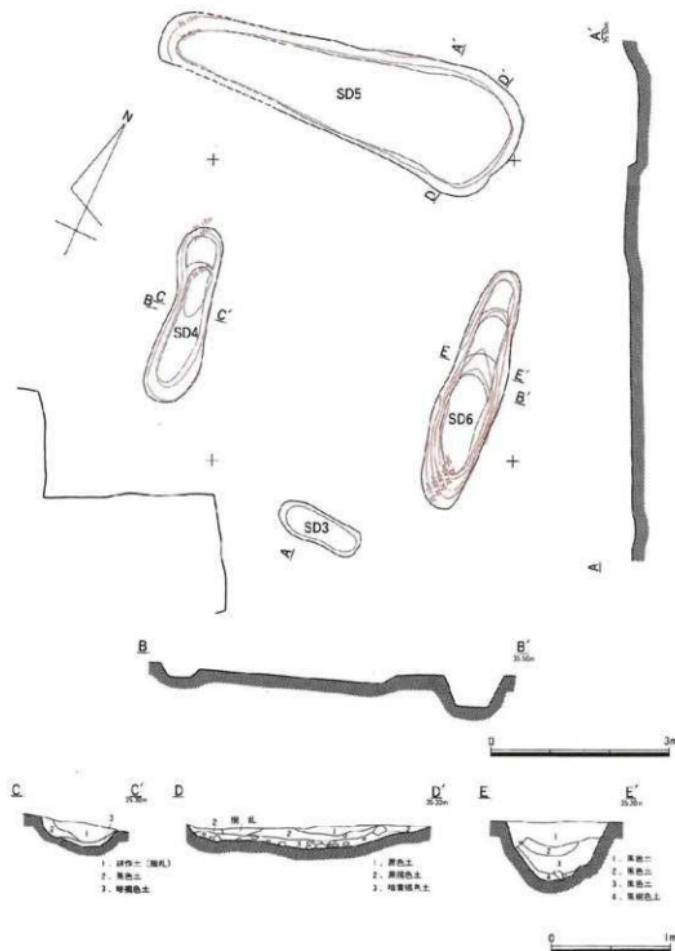
周溝は、南側溝SD3、西側溝SD4、北側溝SD5、東側溝SD6で方台部四隅において陸橋状に切れるものである。それぞれの確認面における規模（SD3・SD4・SD5の一部がそれぞれ農道による搅乱をうけており規模は明確でない）は、SD3が幅56cm×長さ1m55cm×深さ10cm、SD4が幅84cm×長さ3m10cm×深さ27cm、SD5が幅1m10cm（推定）×推定3m60cm（SD5の全長は6m18cmであるがこの長さは3号方形周溝墓に係る長さであり、2号方形周溝墓に係る溝の長さとして任意に設定し計測した）×深さ20cm、SD6が幅1m×長さ4m10cm×最深度60cmである。SD6は、3段の階段状掘り方を示す溝である。

溝覆土は、大きく3つに分層されるもので、上層が黒色土、中層が黒褐色土乃至は黒色土でSD5では礫が含まれていた。下層は、暗黄褐色土でSD5において礫が含まれるものであった。

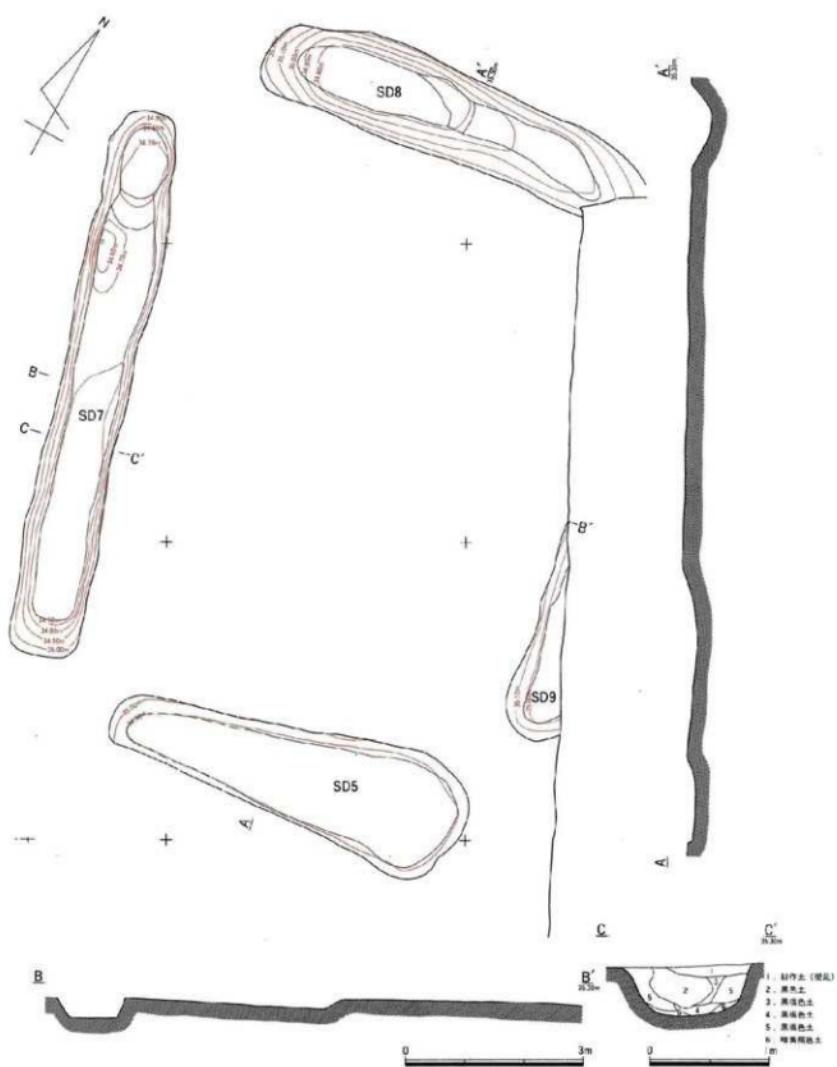
出土遺物は、第14図9~18に示したもので、完形品・準完形品の出土はなかった。



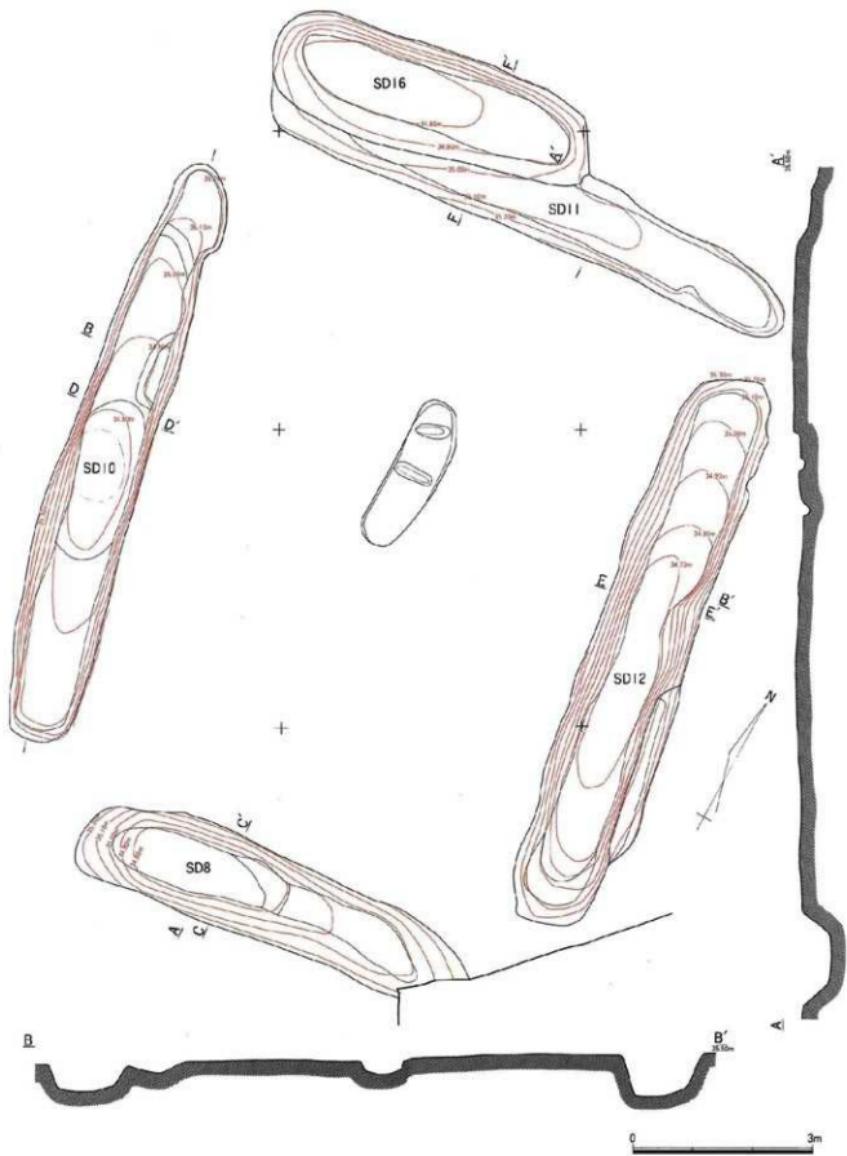
第4図 第1号方形周溝墓実測図



第5図 第2号方形周溝墓実測図



第6図 第3号方形周溝墓実測図



第7図 第4号方形周溝墓実測図

第3号方形周溝墓

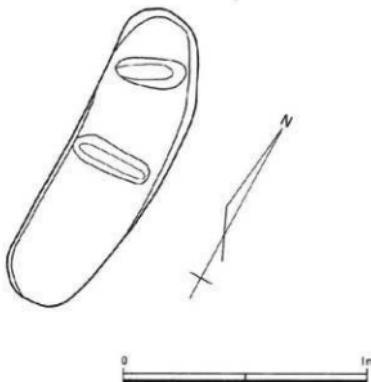
3号方形周溝墓は、C～E-9～11グリッドの範囲に位置し、南側溝SD5が2号の北側溝と切合、北側溝SD8は4号方形周溝墓南側溝と共有するものである。周溝墓群としては、2号・4号・11号と同一群に属されるものである。

方台部の大きさは、南北長10m56cm×東西長8m10cmを測り、方台部上面は農道削平部を除いてほぼ平坦面を形成するものである。主体部は、検出し得ていない。SD5、SD8中央を通る長軸線の方位は、N-11°10' -Wを測る。

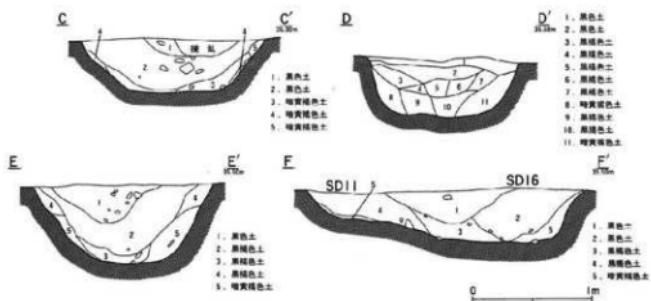
周溝は、南側溝SD5、西側溝SD7、北側溝SD8、東側溝SD9で構成しており、方台部四隅において陸橋状を呈する。それぞれの確認面における規模は、SD5が幅1m40cm×長さ6m18cm×深さ20cm、SD7が幅1m26cm×長さ9m50cm×深さ42cm、SD8が幅1m30cm×長さ(推定)6m90cm×最深度48cmを測る。SD9は大部分が調査区域外に位置しており規模については不明である。またSD8は平坦面を部分的にもつ2段の階段掘りがみられる。

溝の覆土は、大きく3つに分層される。上層が砾を包含する黒色土、中層に黒褐色土(上層に含まれていた砾は姿を消す)、下層に地山ローム層との溶混が激しく全体的に黄色化した暗黄褐色土で占められる。

出土遺物は、すべてが土器片で、完形・準完形品は含まれていない。



第8図 第4号方形周溝墓主体部実測図



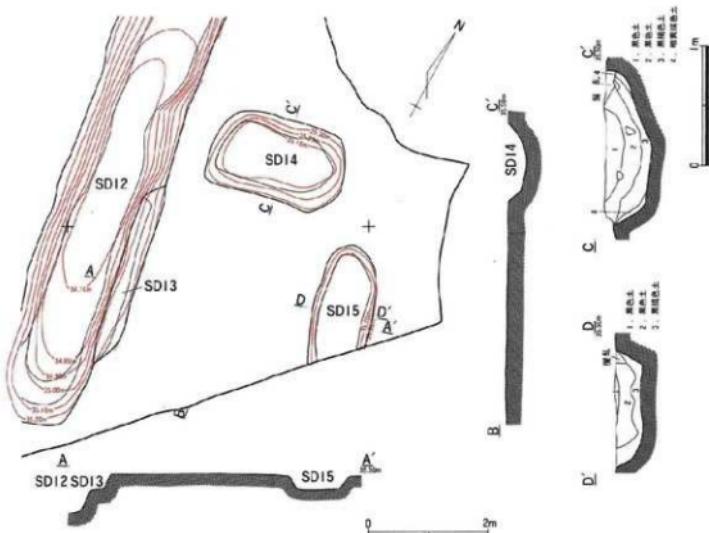
第9図 第4号方形周溝墓周溝土層断面図

第4号方形周溝墓

4号方形周溝墓は、B～D-11～15グリッドの範囲で検出した方形周溝墓で、今回の調査で検出した方形周溝墓中最大規模をもつ。南側溝SD8が3号北側溝として共有するもので、北側溝SD11は6号南側溝SD16と切合い関係にある。SD11とSD16との新旧関係は、SD11の方が古いことが確認されている（第9図参照）。また東側溝SD12は5号西側溝SD13と切合い関係にあるが、新旧関係は、覆土上面に耕作が及んでおり明確とならなかった。周溝墓群としては、再三述べてきたように2号・11号・3号と同一群に属するものと考える。

方台部の大きさは、南北長11m67cm×東西長8m67cmを測り、方台部上面は部分的に農道による削平がみられるがほぼ平坦面を成している。また方台部中央や北寄りには、掘り方残存状態で主体部が確認された（第8図参照）。形状は、幅82cm×長さ2m62cm×深さ7cmを測る舟底形を呈するもので、床面には木口板を立てたと思われる掘り方（幅12cm×長さ29cm×深さ8cmのものと幅12cm×長さ34cm×深さ15cmを測る椭円形の掘り方）が確認された。この木口板の間隔は85cm程で小さく思われる。また、この主体部南側でも椭円形の掘込みが確認されており、この位置にも主体部が存在していた可能性がもたれる。この主体部の長軸方位はほぼN-0°-Wである。また方台部長軸の方位もN-5°-Wを指すことが確認されている。

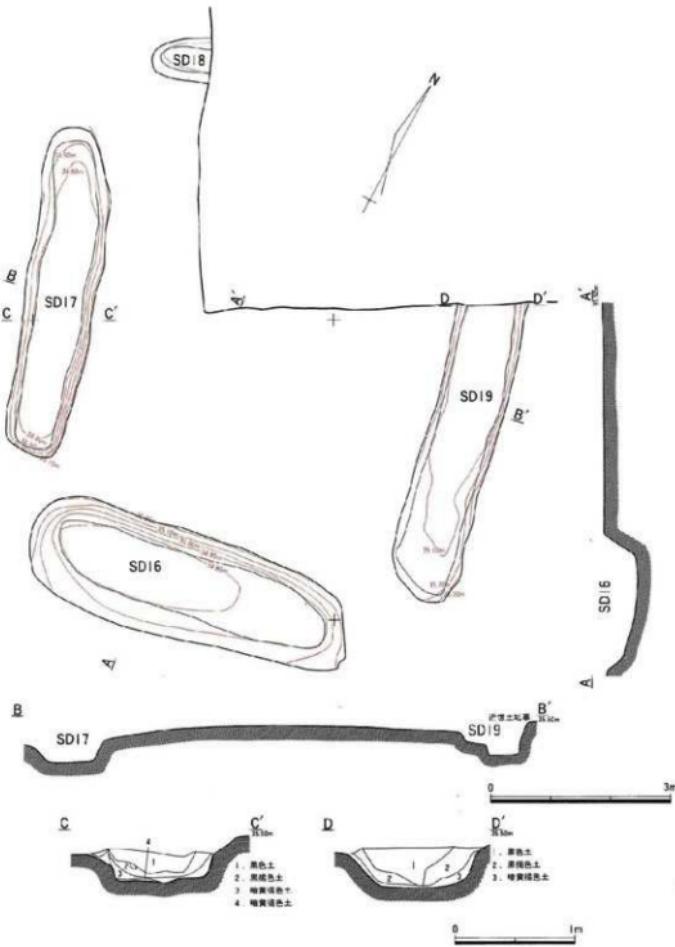
周溝は、南側溝SD8、西側溝SD10、北側溝SD11、東側溝SD12で構成しており、方台部四隅において陸橋状に途切れる。各溝の確認面における規模は、SD10が幅1m10cm×長さ10m×深さ50cm、SD11が幅1m30cm×長さ（推定）9m50cm×深さ12cm、SD12が幅1m60cm×長さ9m70cm×



第10図 第5号方形周溝墓実測図

深さ75cmを測る。尚SD10は溝中央において一段低い凹をもつものである。

溝の覆土は、大きく4層に分層できるもので、上面に黒色土（疊多量に含む、湿気をもちかたくしまりのある土層）で2枚形成、中面では黒褐色土（ロームとの溶混がみられ、湿気をもちかたくしまりのある土層）で上面の黒色土と比較すると包含される疊が存在しないのが特徴である。下層は、ロ



第11図 第6号方形周溝墓実測図

ームとの溶混が激しく全体的に黄色を呈すものである。

出土遺物については第13図2・4、第15図21・22がS D12からの出土であり、それらはすべて中層黒褐色上面からの出土である。第13図3は、S D10からの出土品である。

第5号方形周溝墓

5号方形周溝墓は、B-11・12グリッドに位置する方形周溝墓で今回検出した方形周溝墓中最も小さなものである。西側溝S D13が4号東側溝S D12と切合い関係にある。残念ながら新旧関係についてはつかめていない。方形周溝墓群としては、1号方形周溝墓と同群に属するものと考えているが、他周溝墓間の関係をみると、群を異にする周溝墓は、周溝を隔絶しており切合い乃至は共有することはない状況がみられることから、本周溝墓は4号方形周溝墓と同群に属していく可能性があることをつけくわえておく。

方台部の大きさは、南北長不明×東西長3m20cmを測り、上面はほぼ平坦面を成すものである。方台部上からは主体部の検出はなかった。長軸方位は、周溝墓南側溝の検出がなかった為明確でないがほぼN-7°40'-Wを示すものである。

周溝は、西側溝S D13、北側溝S D14、東側溝S D15を検出、南側溝については調査区域外である為検出できなかった。各溝の確認面における規模は、S D13が幅不明×長さ3m18cm×深さ（確認した部分の深さ）30cm、S D14が幅1m40cm×長さ2m30cm×深さ33cm、S D15が幅1m×長さ不明×深さ23cmを測る。

溝の覆土は、大きくみて4つに分層される。上層部に黒色土が2枚存在しこれらはしまり具合により分層される。その下に黒褐色土（ロームとの溶混がみられかたくしまりのある土）さらに暗黃褐色土（ロームとの溶混が激しく黄色を呈し、かたくしまりのある土）が存在する。

遺物は、準完形品の土器第13図5がS D15の調査区隅の黒色土中から出土している。

第6号方形周溝墓

6号方形周溝墓は、B-D-13~15グリッドの範囲に検出した方形周溝墓で、南側溝S D16が4号北側溝S D11と切合い関係にある。新旧関係は、先述したとおりS D11の方が古いことが確認されている（第9図参照）。方形周溝墓の群としては、2号・11号・3号・4号と同列を成しており、またS D16とS D11が切合い関係にあることから同群に含めるものであるが、S D16とS D11とでは平面傾きが違うつまり長軸方位が明らかに違うことから別群として見直さなければならないかも知れない。今後の調査により明らかにされていくものと思われる。

方台部の大きさは、南北長約7m70cm×東西長6m10cmを測り、方台部面は中央がやや高く凸面を形成する。6号においても主体部は検出されなかったが、C-14・15グリッドに検出された土壤状掘り込みが気になる。方台部の長軸方位は、S D18が部分的検出の為明確でないがS D17・19の方方位からほぼN-9°-Wを示すものである。

周溝は、南側溝S D16、西側溝S D17、北側溝S D18、東側溝S D19で構成される。方台部四隅において陸橋状に途切れる。各溝の確認面における規模は、S D16が幅1m80cm×長さ5m80cm×深さ55cm、S D17が幅1m20cm×長さ5m60cm×深さ35cmを測る。S D18についてはほとんどが調査区域外にあり規模については不明としておく。S D19が幅1m10cm×長さ不明×深さ38cmを測るものである。

溝の覆土は、大きく4層に分層され、上層に黒色土層として2枚存在する。両層中には礫が含まれ

ており、土のしまり具合により分層される。下層には黒褐色土（ロームとの溶混がみられ黄色味が増す。湿気がありかたくしまりのある土である。）と溝底付近に暗黄褐色土（ロームとの溶混が激しく全体としてかたくしまりのある土）が存在する。

出土遺物の多くは、黒色土下層に存在していたことが注目される。

第7号方形周溝墓

7号方形周溝墓と表記しつつも全体像については不明である。方形周溝墓とした理由は、B-13～14グリッド中に溝S D20・S D21が検出したことからである。尚、このS D20・S D21の方位は他の方形周溝墓周溝と方位を異にしており注目される。

S D20と切合い関係にあるS D11・S D16・S D19との新旧関係は、図示していないがS D20がいずれの溝よりも新しいことを確認している。またS D12との直接的な新旧関係はとらえきれていないが、S D11とのからみからやはりS D20が新しいものとなると思われる。

溝ならびに方台部も明らかでない。よって長軸方位も不明である。

溝の覆土は、S D20が黒色土及び黒褐色土で構成されており、S D21はさらに暗黄褐色土が加わる。

出土遺物は、土器小破片であった。

2. 古墳時代以降

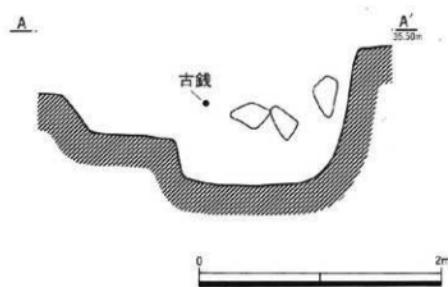
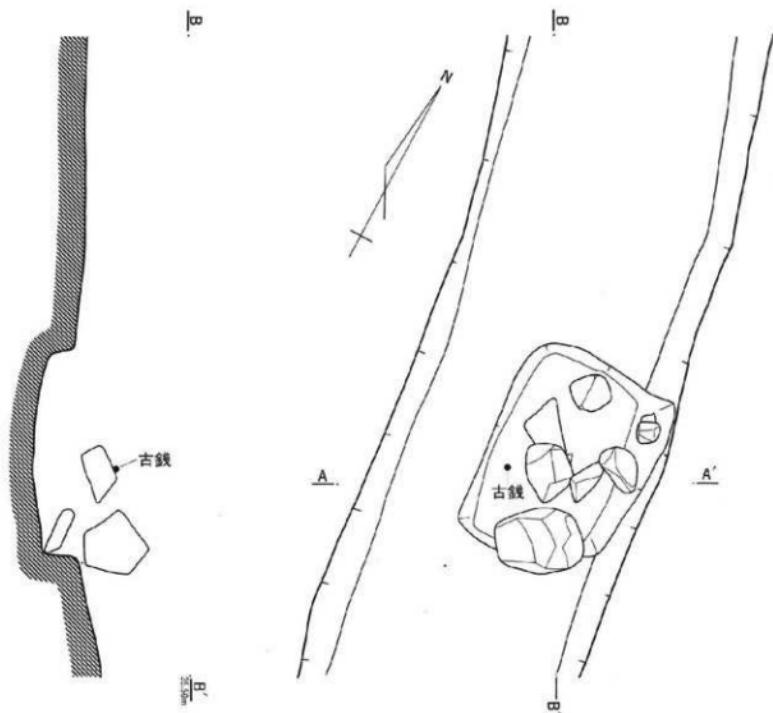
古墳時代以降の遺構として検出したものに、柱穴列2群、近世土壤墓1基、土壤状掘り込み2基がある。ここでは柱穴群及び土壤状掘り込みについての触りを述べ、近世土壤墓については規模等を詳述したい。

柱穴列は、1群が3号方形周溝墓方台部上（D-9・10グリッド）に位置するもので、別群が4号方形周溝墓方台部上（C-11～13グリッド）に位置するものである。前群は、径20～30cm×深さ15～20cmを測るもので、比較的小さな柱穴3つ2組が一線に並ぶものである。柱穴間隔は約1mである。しかしこの柱穴列に並行する柱穴列は検出していない。後群では、柱穴列というよりも柱穴群といった方が良いものである。径20cm～40cmと前群より大きく深さについても30cm前後と深くなる。しかし配列について規則性がなくやはり群と呼ぶべき状況にある。

土壤状掘り込みは、6号方形周溝墓方台部上（C-14～15グリッド）に2基検出している。1つは長径90cm×短径65cm×深さ21cmを測るもので、今1つは半分程を調査区域外にもつもので規模は定かでない。方台部上の位置から考えて、6号方形周溝墓の主体部とも見られる位置にある。

柱穴列・土壤状掘り込みについては出土遺物がなく時期不明である。調査区耕作土掘り下げの際出土した遺物のはほとんどが奈良から平安期にかけての遺物であることからこの時期である可能性がもたれる。

近世土壤墓は、B-14グリッド6号方形周溝墓東側溝S D19溝内に検出している。土壤規模は、長径1m×短径65cm×深さ54cmを測り、形状はほぼ長方形プラン、長軸方位はN-5°-Wである。覆土は、黒色土2枚で構成されており、人頭大の大きな河原石が崩れ落ち込むような形で検出している。覆土は、寛永通宝錢12枚が束になって検出した黒色土（湿気が多く小砂利が多量に入りしまりのない土）と、下層に湿気が多くしまりのない黒色土で構成されている。その他、人骨等の出土はなかった。



第12図 近世土塁墓実測図

第2節 遺 物

今回の調査で得られた遺物は、方形周溝墓から出土の弥生土器、そして耕作土から出土の須恵器片土師器片等があるが、本報告では方形周溝墓出土の弥生土器についてのみ報告する。

第1号方形周溝墓出土土器（第13図1、第14図7・8）

これら出土土器はすべてS D 2からの出土である。出土状況はS D 2 覆土下層暗黄褐色土上面からの出土で安定していること、出土品が1に示すように完形品であることからS D 2の築造時期判定に好資料となるものと思われる。

1は、口径13.5 cm×頸部径11.0 cm×胴部径16.8 cm×底部径5.8 cm×器高28.5 cmを測る広口壺である。色調は明黄褐色、胎土中に石英・長石・チャート粒を少量含む、焼成の良い土器である。器面は口唇部に指頭圧痕、頸部にやや彫りの深い斜位条痕、胴部には継位条痕を地文的に施文後5~6条からなる横位条痕文、胴下半部には浅い斜位の条痕が施されている。内面には指頭ナデが施されている。

7は、棒状工具による平行の沈線文・波状文が施される。8は、やや彫りの浅い斜位条痕文土器である。

第2号方形周溝墓出土土器（第14図9~18）

紹介する土器のほとんど（9~14、17、18）がS D 6からの出土であり、15と16がD-8グリッドからの出土である。9~12・17は細頸壺破片、13~16・18は変形土器の口縁部および胴部破片である。

9は棒状工具による横位ならびに斜位の沈線文、10は棒状工具による横位の平行沈線文が施されるものである。11はやはり棒状工具による横位に流れる波状文、12は櫛描きによる横線文プラス波状文の交互組合せ文が施される。17は10と同一個体と思われる。

13は口唇部に二条の沈線が施されるもので器面にはやや彫りの深い継位の条痕が施される。14は口唇部に棒状工具による押捺刻み、そして器面には継位の条痕、円形の貼付文がみられる。15・16は口唇部に刻み目文、器面に斜位条痕がみられるものである。18は継位の羽状条痕をもつものである。

第3号方形周溝墓出土土器（第14図19・20）

ここに紹介する資料はいずれもS D 5内からの出土で、19は細頸壺の口縁部破片である。器面には地文として棒状工具による刺突が施され櫛織文を呈す。波状の隆帯上にもこれがみられ、頸部では同一工具による押引きがみられる。20は櫛描き横線文と波状文が施される細頸壺の頸部破片である。

第4号方形周溝墓出土土器（第13図2~4、第15図21~25）

今回の調査で最も多量に出土した遺構は4号方形周溝墓である。なかでもS D 12からの出土品には準完形品が多く含まれている（第13図2・4、第15図22）。2は胴部最大径13.2 cm×底部径6.6 cmを測る細頸壺の胴部以下である。器面には彫りの浅い横羽状の細い条痕、胴下半部ではナデが施され施文が消失している。内面はナデ調整されている。尚、胎土は色調が褐色を呈しており、焼成の良好な土器である。4は、細頸壺の頸部以上の破片で口唇部ナデ、口縁部は非常に浅く細い斜条痕そしてその下部では条痕がナデ消されるものである。頸部には棒状工具により横位に平行沈線文が施されるものである。内面にもやはり細い条痕が施され後ナデにより部分的消失が見られる。頸部にはしばり痕

が見られるものである。胎土は、褐色を呈し焼成良好である。22は、器面に連続する爪形文及び斜位の平行沈線文が見られるものである。原体としては半截竹管状工具によるものとみられる。

S D 11からの出土土器として21がある。頸部に数条の棒状工具による連続押捺文を地文として縦横位にやや太い棒状工具による区画がみられる。肩部から胸部にかけては、縦位に細いハケ目調整の後横位条痕、胸部では横羽状の条痕施文後、2本の棒状工具による大きな波状の平行沈線文がみられる。この2本の波状文の間には鋸齒状に数条の浅い条痕がなされている。

S D 10からの出土土器として3がある。口径 9.5 cm の細頸壺で口縁がやや内湾ぎみに傾く。口唇部は平坦面をつくる形状をとる。器面には数条単位の棒状工具による縦位あるいは斜位条痕がみられその後頸部において横位の平行沈線が施される。内面は指頭ナデによる調整痕、頸の細くしまった部分にはしづぼり目がみられる。

その他4号方台部上のC-13グリッドからの出土資料として23~25がある。これらはいずれも櫛描文で地文としてハケ目がみられる。23は波状文、24は横線文、25は格子目文である。

第5号方形周溝墓出土土器（第13図5、第15図26）

S D 15上層黒色土から出土した資料で丹彩の細頸壺である。口縁部は外反し口径14 cm を測る。口唇部は浅く細かい刻み、口頸部にかけてヘラ磨き、ヘラ状工具による円形の刺突が施され、頸部から肩部にかけ太い沈線により区画がなされるものである。内面はナデによる調整がみられる。26はS D 14からの出土土器で櫛状工具による施文がみられる。

第6号方形周溝墓出土土器（第13図6、第15図27~33）

S D 17からの出土土器として6があげられる。口縁部がくの字状に内湾する細頸壺で口径33 cm を測る大型破片である。S D 17からの出土とは言え出土状況は上部搅乱土からの出土であることに注意したい。口唇部に浅いヘラ状工具による押捺、口縁部文様として棒状工具による二条の連弧（波）状沈線文。その間に5条の櫛状工具による波状文充填。またその外側にはヘラ状工具による斜位方向の沈線の充填がみられる。口径の最大径をなす突出部にはヘラ状工具による刻みが施され、頸部にかけてナデ調整がみられる。

S D 19からの出土土器として28・29・31~33があげられる。これらはいずれも条痕文の施される菱形土器で、28・29はその口縁部破片である。端部には、ヘラ状工具による刻み目がみられ、横羽状の条痕が施されるものである。

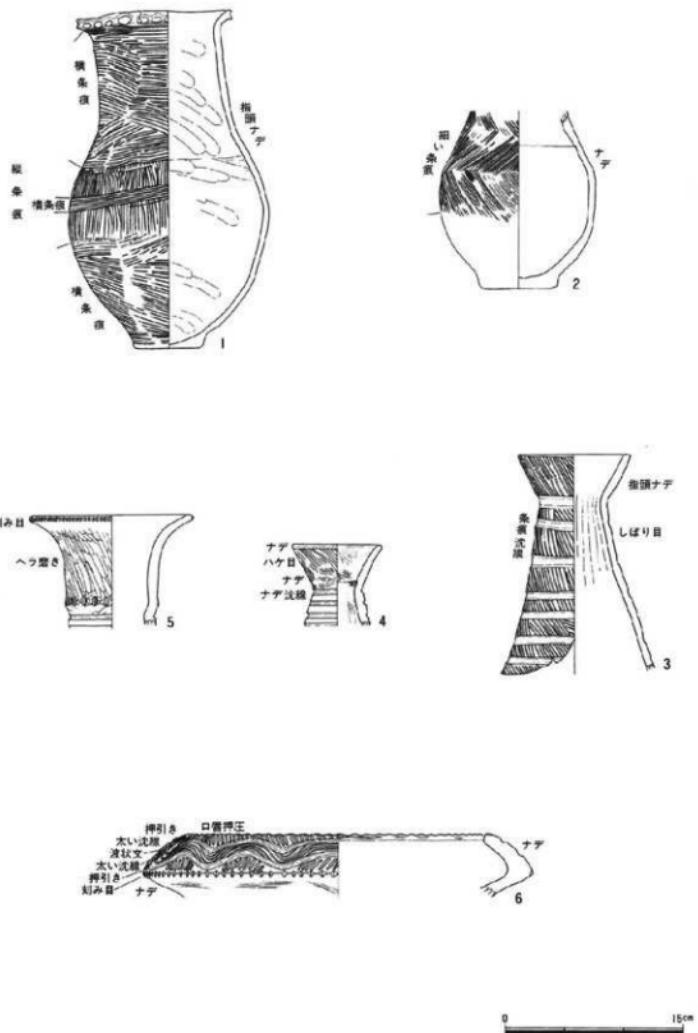
27・30は周溝以外の方台部上面からの出土土器である。27は器面に櫛描横線文が施される細頸壺である。30は28・29同様横羽状条痕文、口唇部ヘラ状工具による刻み目が施される菱形土器である。

以上が今回調査により検出した方形周溝墓から出土した土器についての概要である。

第3節 まとめ

掛川市教育委員会の調査により明らかとなつたものは上述したとおりである。ここでは調査内容を反復して述べることをさけ、再び方形周溝墓に戻りまとめてかえたい。

今回検出した方形周溝墓は、大きさのうえでまちまちであり、例えば2号方形周溝墓方台部の大きさ南北長6 m 00 cm ×東西長4 m 34 cm を測り、今回検出した方形周溝墓の中で最大規模を測る4号方形



第13図 出土土器実測図

周溝墓に至っては南北長11m, 67cm × 東西長8m, 67cmを測り2号方形周溝墓に比べ長さで約2倍の規模となる。この大きさの違いの要因は今だ実証されるべく根拠がなく記述することができない。そこでここでは、試験的であるが全貌の明らかな方形周溝墓2号・3号・4号の規模における規則性について数値表現をしてみたい。

方台部規模、南北長と東西長との比(東西長／南北長)について検討を加えると、

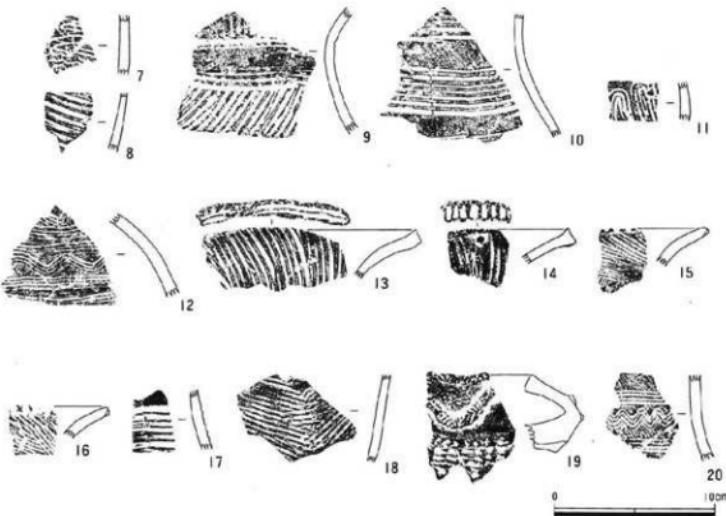
2号方形周溝墓 $434 / 600 \approx 0.72$ 3号方形周溝墓 $810 / 1056 \approx 0.76$

4号方形周溝墓 $867 / 1167 \approx 0.74$

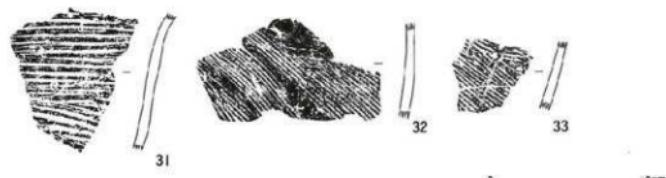
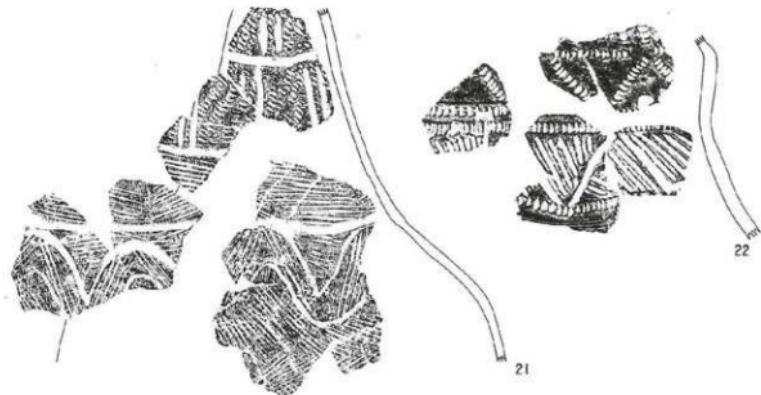
というような近似した数値が得られる。これは、方形周溝墓の大きさにかかわらず東西長・南北長比に統一的な作用がはたらくことから得られるものと思われる。よってここには一種の規則性が存在することが窺われるのである。

次に周溝比について眺めてみると2号・3号について周溝各溝が完全な形で検出していないこと、また確認面の高低により規模が異なってしまうことから比較の対象とならない。しかしあえて4号において検討を加えると、SD8の全長/SD10の全長 = $690 / 1000 = 0.69$ 、SD11の全長/SD10の全長 = $950 / 1000 = 0.95$ 、SD8の全長/SD12の全長 = $690 / 970 \approx 0.71$ 、SD11の全長/SD12の全長 = $950 / 970 \approx 0.98$ という結果を得た。全体ではアンバランスな数値であるが、一つの東西方向の溝例えばSD8に対する南北方向の溝SD10、SD12はそれぞれ近似した数値をもち、ここにおいても規則性がはらうているものと思われる。

今後、山下遺跡内において検出される方形周溝墓について同様な検討を加え、方形周溝墓のあり方についてとらえる必要があると思われる。



第14図 出土土器拓影



0 10cm

第15図 出土土器拓影図

第6章 袋井市教育委員会の調査

第1節 遺構

1. 弥生時代の遺構

当該期の遺構には、方形周溝墓、溝状遺構、土坑がある。

方形同濟集

第8号方形周墓

D・E-2・3区で検出された。東溝(SD22)と北溝(SD23)を検出したにとどまり、本造構の大半は、調査地区外に位置する。

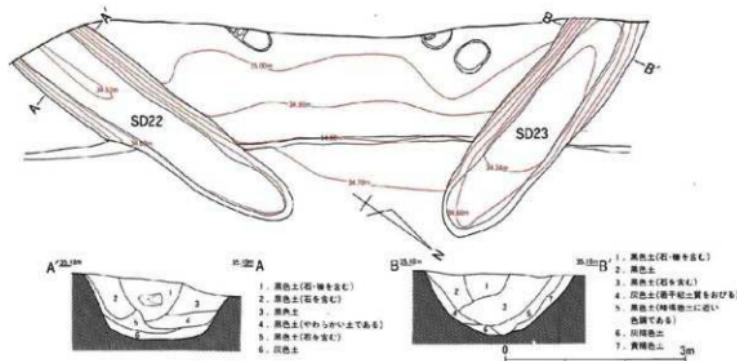
東溝(SD22)は、調査地区内の長さ約5m、幅約1.2m、深さ約50cmを測る。溝の壁は、湾曲することなく、斜めに直線的に立ちあがる。溝内には黒色土が厚く堆積しており、溝底に薄く灰色土が堆積している。黒色土中より若干の礫・土器片が出土している。

北溝(S D23)は、調査地区内の長さ約4.5m、幅約1.2m、深さ約50cmを測る。溝の断面は丸味をおび、壁は溝底より緩やかに立ちあがる。溝内には黒色土が厚く堆積しており、その下に灰褐色土が堆積している。

長軸方位は、N-3°Eをはかる。

第9号方形周溝墓

D-5区、E-4・5・6区にかけて検出された方形周溝墓で、SD27(東溝)、SD25(西溝)、SD24(南溝)、SD26(北溝)を周溝とする。SD25は、第10号方形周溝墓の東溝(SD28)を切



第16図 第8号方形周溝墓実測図

っているように観察され、第10号方形周溝墓より新しい時期に築造されたものと考えられる。

東溝（SD 27）は、道路により上面を削り取られており、溝底近くの5cm程度が残っていた。現存の長さ約2.4m、幅約65cmを測る。

西溝（SD 25）は、調査地区内の長さ約1.4m、幅約70cm、深さ約35cmを削り、壁は緩やかに立ちあがる。

南溝（SD 24）は、調査地区内の長さ約1.8m、幅約90cm、深さ約25cmを測る。溝の断面は丸味を帯び、壁は緩やかに立ちあがる。溝内覆土は、上層に黒色土（若干礫が混じる）、下層に暗褐色土となっている。

北溝（SD 26）は、溝の西端約50cmを残し、道路により削り取られている。

長軸方位は、N-10°30'-Eをはかる。また規模は、東西長・南北長ともに約4.5mを測る。

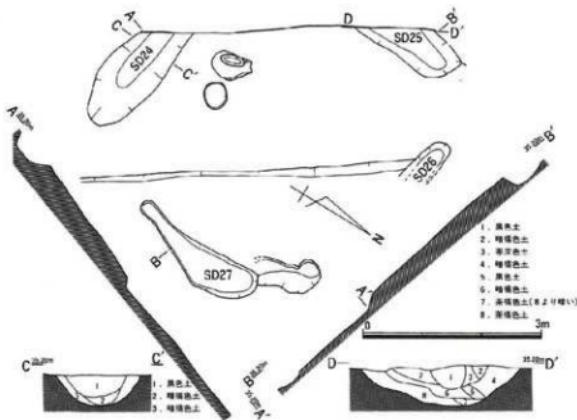
第10号方形周溝墓

E-6・7区で検出されたSD 28（東溝）とSD 29（北溝）である。

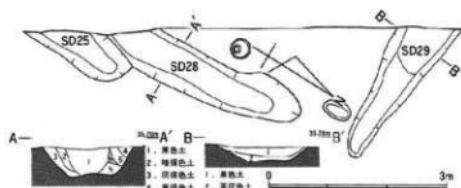
東溝（SD 28）は、調査地区内の長さ約3.2m、幅約80cm、深さ約30cmを測る。溝内中央には、黒色土が堆積している。また、溝底より約20cm浮いた状態で壺の底部が出土している。

北溝（SD 29）は、調査地区内の長さ約2.5mを測る。発掘区限界より約90cm東の地点から西が、溝東端より若干深くなり、発掘区限界地点で幅約90cm、深さ約15cmを測る。溝の壁は緩やかに立ちあがる。

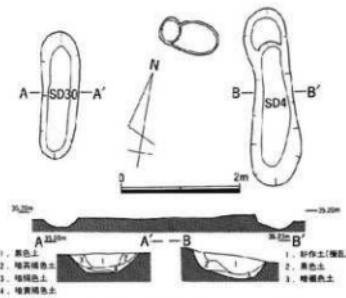
長軸方位は、N-5°-Wをはかる。



第17図 第9号方形周溝墓実測図



第18図 第10号方形周溝墓実測図



第19図 第11号方形周溝墓実測図

第11号方形周溝墓

西溝（SD 30）は、約3mの間隔をおき、SD 4と並走する。

長さ約2.2m、幅約60cm、深さ約20cmを測る。溝の壁は緩やかに立ちあがる。

この溝は、第3号方形周溝墓の西溝（SD 7）、第4号方形周溝墓の西溝（SD 10）、第6号方形周溝墓の西溝（SD 17）の同一線上に位置する。

このSD 30が西溝となり、SD 4を東溝、SD 5（第3号方形周溝墓南溝）を北溝とする方形周溝墓と考えられるが、南溝は調査地区外に存在する可能性もある。

第12号方形周溝墓

F・G-8・9区で検出された。SD 33（東溝）、SD 31（西溝）、SD 32（北溝）を周溝とする。SD 32は、第13号方形周溝墓の南溝を兼ねる。また、SD 33は、浅い溝により、SD 36・SD 39と連結する。

東溝（SD 33）は、調査地区内の長さ約3.7m、幅約1m、深さ約25cmを測り、溝の北端は緩やかに立ちあがる。

北溝（SD 32）は、長さ約5.7m、幅約1.2m、深さ約45cmを測り、溝の壁は垂直に近く立ちあがる。溝底より約10cm程度浮いた状態で礫が約10個出土している。

西溝（SD 31）は、北端部分を検出するにとどまった。

本方形周溝墓の東西長は約5mを測る。

長軸方位は、N-8°30'-Wである。

第13号方形周溝墓

E・F・Gの9・10・11区に位置する。SD 36（東溝）・SD 34（西溝）・SD 32（南溝）・SD 35（北溝）を周溝とする。SD 32を第12号方形周溝墓と、SD 35を第14号方形周溝墓と共有する。

方台部の東側の両コーナー（南溝と東溝の間・東溝と北溝の間）は、方台部を半円形に削り取っている。

方台部のほぼ中央で主体部が検出された。

主体部

主体部掘り方平面形は、東西約80cm、南北約2mの長方形を呈し、深さは約10cmを測る。

長軸方位は、N-12°-Wをはかる。

掘り方の両端近くには、小口板の痕跡と思われる溝が存在した。この小口溝間の距離は、約1.3mを測る。小口溝は、掘り方と直交しておらず、若干傾いている。また、北小口溝は、内側に接続する溝をもつ。両小口溝の内側の覆土は、1.暗茶褐色土（粒子細かく、黒色土が混じる）、2.灰褐色土（黒

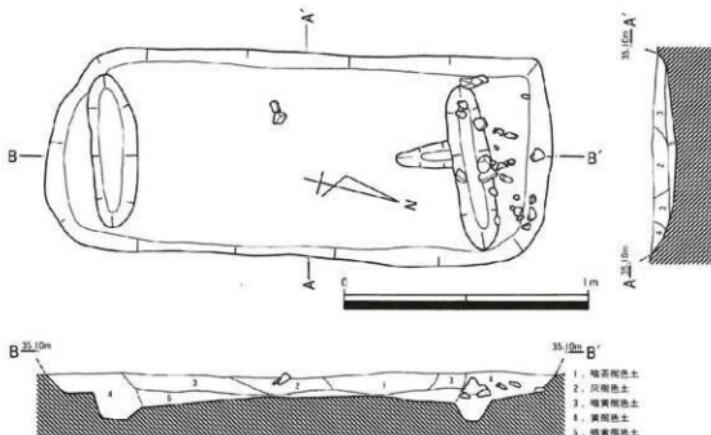


第20図 第12号方形周溝墓実測図

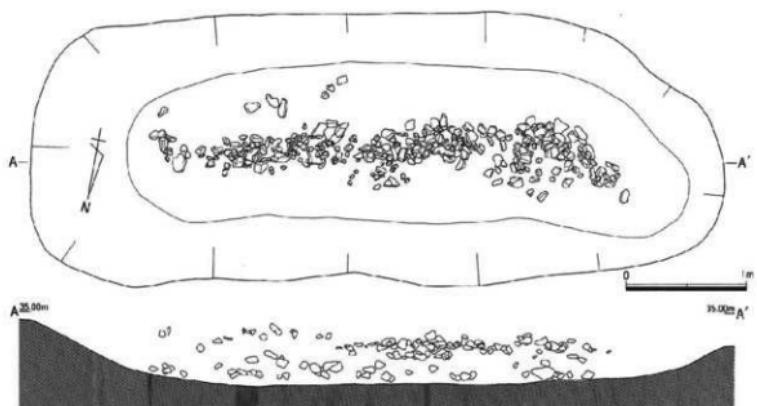
色土が混じる)、3.暗黄褐色土(粒子少し粗い)、4.黄褐色土(粒子少し粗い)、5.暗黄褐色土となっている。小口溝の外側の覆土は、黄褐色土(地山土)に黒色の粒子が混じる土であった。

また、北小口溝の外側の埋め土には、小礫が混じっていた。

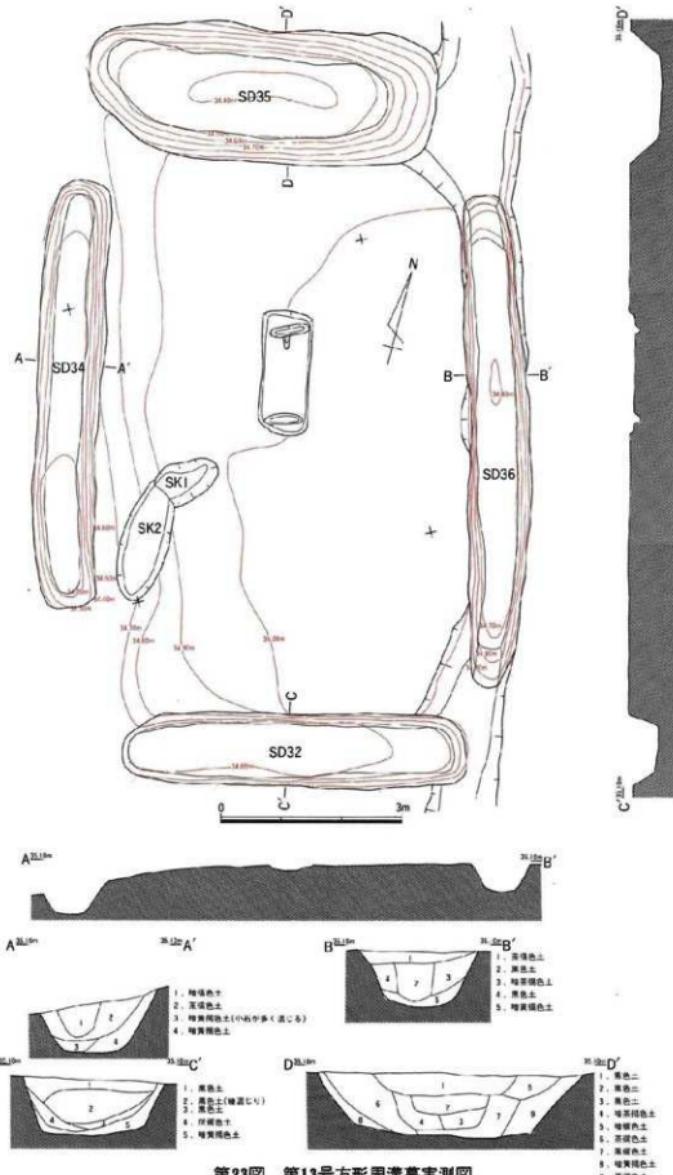
主体部からは、覆土・北小口溝内より、土器の小片が出土している。



第21図 第13号方形周溝墓主体部実測図



第22図 S D 35内礫・土器出土状況図



第23図 第13号方形周溝墓実測図

周溝

東溝（S D 36）は、長さ約 8.2 m、幅約 1 m、深さ約 40 cm を測る。溝の南北両端は西を向いており、溝は緩く弧状をえがく。

西溝（S D 34）は、現存長約 7.1 m を測るが、南端部分を高圧線鉄塔の支柱で破壊されているため、本来の規模は不明である。幅約 1 m、深さ約 40 cm を測る。溝の北端は、緩く東に曲がっている。溝内覆土の暗褐色土中に約 30 個の礫が存在した。

北溝（S D 35）は、長さ約 5.8 m、幅約 2.2 m、深さ約 60 cm を測る。溝内の覆土は、1. 黒色土（小礫が多く混じる）、2. 黑色土（小礫・土器が混じる）、3. 黑色土（少し粘りけがあり、土器が混じる）、4. 暗茶褐色土（小礫が比較的多く混じる）、5. 暗褐色土、6. 茶褐色土（小礫が少し混じる）、7. 黑褐色土（少し粘りけがある）、8. 暗黃褐色土、9. 茶褐色土となっている。2 層の黑色土に多く礫が混じっていた。土器は、細片化して礫の間に散在していた。

本方形周溝墓の規模は、東西約 6.6 m、南北約 9.8 m を測る。長軸方位は、N-14°30' - W である。

第14号方形周溝墓

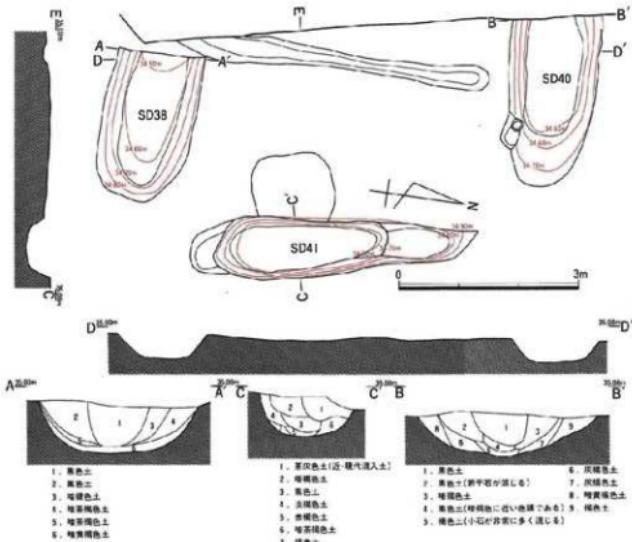
E・F の II・12・13 区に位置し、S D 39（東溝）・S D 35（南溝）・S D 38（北溝）を周溝とする。S D 35 を第13号方形周溝墓と、S D 38 を第15号方形周溝墓と共有する。

東溝（S D 39）は、長さ約 7.6 m、幅約 1.3 m、深さ約 40 cm を測る。溝の南北両端は、緩やかに立ちあがる。溝内の覆土は、1. 黒色土（礫が下部に集中する）、2. 茶褐色土、3. 灰褐色土である。

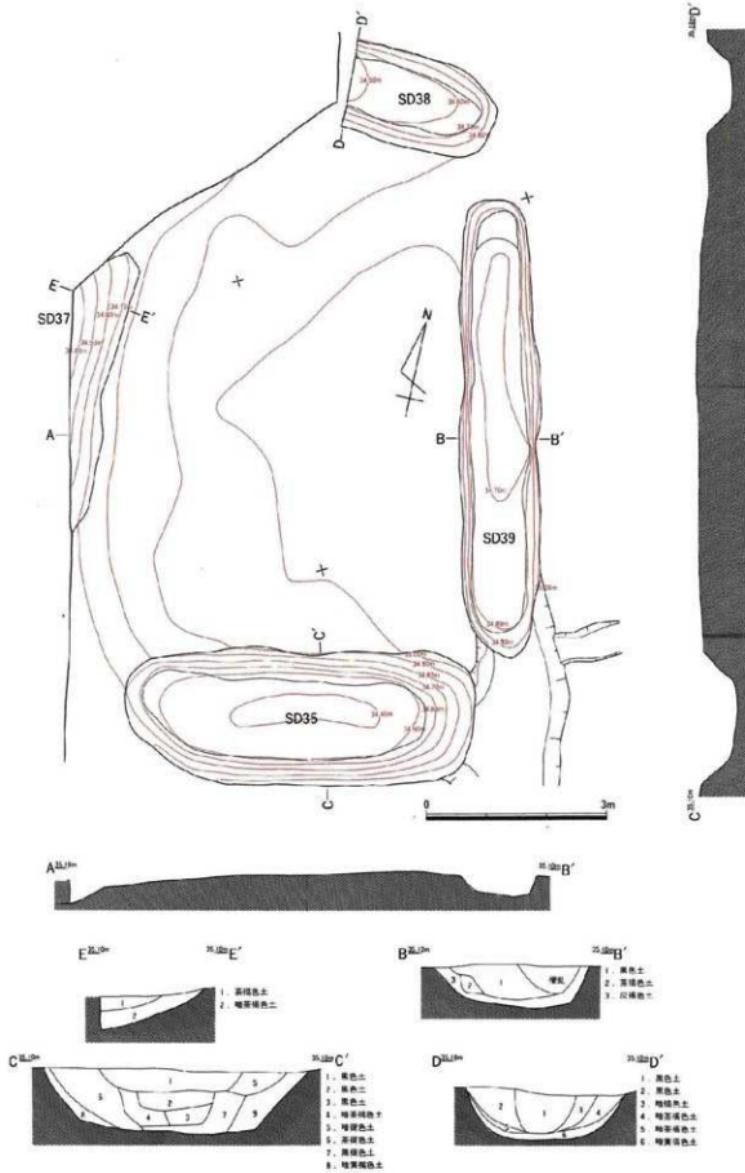
S D 37 は、丘陵縁辺部で検出した斜面の落ち際で、緩やかに降下する。堆積土は、上から茶褐色土、暗茶褐色土となっている。茶褐色土中に土器片が混入していた。

北溝（S D 38）

は、調査地区内の長さ約 2.7 m、幅約 1.5 m、深さ約 40 cm を測り、壁は緩やかに立ちあがる。溝内の覆土は、1. 黒色土（礫が比較的多く混じる）、2. 黒色土（礫がほとんど混じらない）、3. 暗褐色土、4. 暗茶褐色土、5. 暗茶褐色土、6. 暗黃褐色土である。礫は、1 層の黑色土に存在したが、量的に少なく散在



第24図 第15号方形周溝墓実測図



第25図 第14号方形周溝墓実測図

的である。

本方形周溝墓の特徴として、南溝と北溝の長軸方向の違いがあげられる。

南溝の長軸方位は、N- $78^{\circ}30'$ -Eをはかり、北溝の長軸方位は、N- $93^{\circ}30'$ -Eをはかる。この北溝の長軸方位は、第15号方形周溝墓の北溝（S D 40）の長軸方位、N- 85° -Eに近いものである。

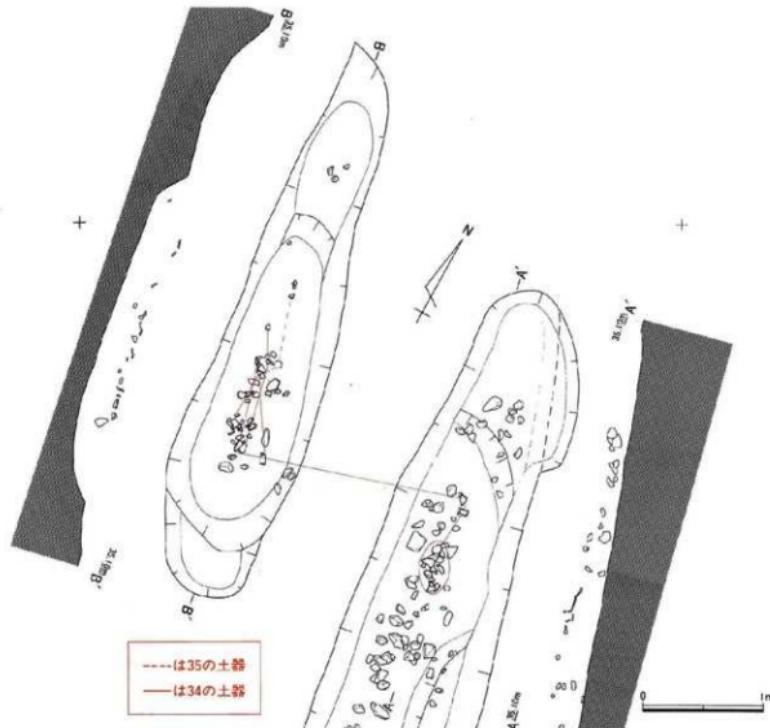
本方形周溝墓の規模は、東西（S D 37とS D 39の上場間の距離）約5.9 m、南北約9.5 mを測る。長軸方位は、N- 12° -Wをはかる。

第15号方形周溝墓

D・Eの13・14区で検出された。S D 41（東溝）・S D 38（南溝）・S D 40（北溝）を周溝とする。S D 38を第14号方形周溝墓と、S D 40を第16号方形周溝墓と共有する。

東溝（S D 41）は、上部を削平されているが、現存長約4.7 mを測る。

この東溝は、細長い溝であるが、ほぼ中央に幅約1.1 m、長さ約2.9 mの楕円形に近い形状を呈する部分が存在する。この部分は、溝底より約20 cmほど深くなり、深さ約45 cmを測る。断面形は、皿



第26図 S D 10（右）・S D 41（左）土器接合状況図

状を呈する。この1段深くなつた部分の覆土中、2層、暗褐色土中より、第33図—34・35の土器が出土している。34・35の土器は、どちらも底面より約25cm程度浮いた状態で出土している。

北溝(SD40)は、調査地区内の長さ約2.8m、幅約1.5m、深さ約40cmを測る。溝内覆土の1層、黒色土中には、礫・小石が多く混じる。

本方形周溝墓の規模は、南北約5.7mを測り、東西は、調査地区内で約3.3mを測る。長軸方位は、N-10°30'Wをはかる。

S D 10・S D 41土器接合状況

第33図—34の壺形土器は、SD10(第4号方形周溝墓西溝)とSD41(第14号方形周溝墓東溝)の両溝中より破片となつて出土したものである。

壺の口縁部・頸部・胴部・底部の大部分は、SD10より出土したが、SD41からも、胴部破片が少量出土している。土器の出土レベルは、SD10で標高34.9m、SD41で標高34.8mを測る。SD10内の土器集中地点とSD41内の土器集中地点間の距離は、約2mを測る。

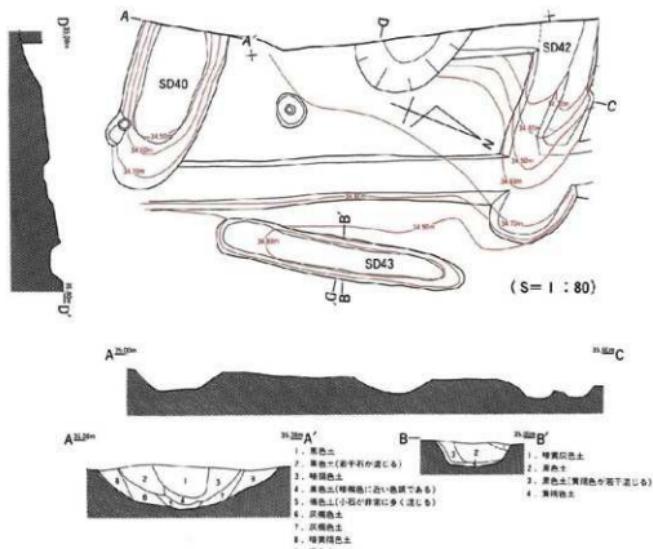
第16号方形周溝墓

D・Eの14・15区で検出された方形周溝墓で、SD43(東溝)・SD40(南溝)・SD42(北溝)を周溝とする。SD40を第15号方形周溝墓と共有する。方台部の北西隅は、土の流出により低くなっている。

東溝(SD43)は、長さ約4.2m、幅約70cm、深さ約20cmを測る。礫は、2層の黒色土の下部に存在した。また、

礫は、溝の南半分に集中するという特色をもつ。

北溝(SD42)は、現存長約3.8m、中央部幅約1.2mを測る。溝底は、中央に棱が走り、棱の南と北がくぼむ。南のくぼみには、茶園の暗渠用の礫が並べられていた。また、溝内には、明赤褐色土(耕作土)が



第27図 第16号方形周溝墓実測図

堆積しているなど、茶園耕作による変容が著しい。

本方形周溝墓の規模は、南北約 5.3 m、東西は、調査地区内で約 3.5 m を測る。長軸方位は、N-13°30' -W をかる。

S D44

D-16区で検出された溝で、現存長約 3 m、幅約 1.4 m を測るが、西端はすでに削り取られ、本来の長さは不明である。深さは約 50 cm を測る。長軸方位は、N-63°-E をかる。

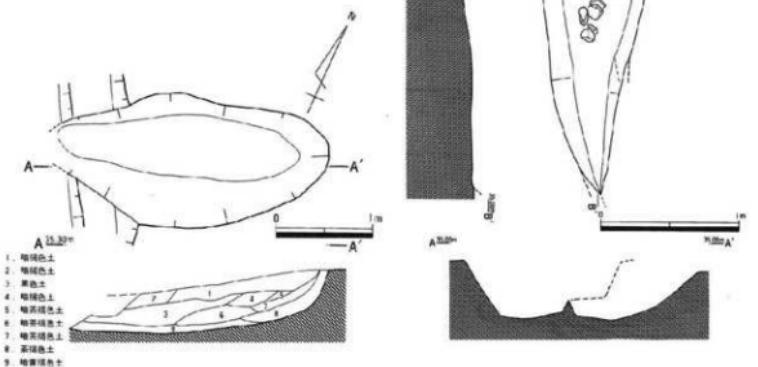
溝内覆土の 3 層、黒色土中には礫が非常に多く混じる。礫は、溝の南半分から浮いた状態で出土しており、溝の南側より落下したものと考えられる。

S D45

C-19、20区、D-19、20、21区で検出された溝である。南端は、擾乱を受けているが、現存長約 6.5 m、最大幅約 1.1 m を測る。長軸方位は、N-40°30' -W をかる。

溝内の覆土は、上層に黒色土、下層に黄褐色土である。黒色土中に礫が多く混じる。

溝の北端近くに、長径約 1.5 m、短径約 50 cm、深さ約 20 cm の長楕円形の一段深く掘られた部分がある。



第28図 S D44 (左) • S D45 (右) 実測図

この部分の上部には、砾が集中している。

土坑

第1号土坑

F-10区、第13号方形周溝墓の方台部で検出された。南端を第2号土坑により切られているように観察される。長軸方位は、N-49°30'-Eである。平面形は、長径約1m、短径約70cmの楕円形を呈する。底面は、若干西に傾斜しており、最深約15cmを測る。

覆土中より、第33図-37、第34図-74の土器が出土している。

第2号土坑

F・Gの10区で検出された土坑で、長径約1.9m、短径約80cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-1°-Eをはかる。断面形は、皿状を呈する。

覆土中より、少量土器片が出土している。

第3号土坑

D-1区で検出された土坑で、SD22に隣接する。平面形は、長径約1.2m、短径約70cmの楕円形を呈する。長軸方位は、N-58°30'-Eをはかる。底面は、東半が深くなり、深さ約30cmを測る。

第4号土坑

E-7区で検出された土坑で、北半分は未発掘である。平面形は、南北約1.1m、東西約1.2mの円形に近い形状を呈し、深さは、約20cmを測る。長軸方位は、N-4°-Wをはかる。

第5号土坑

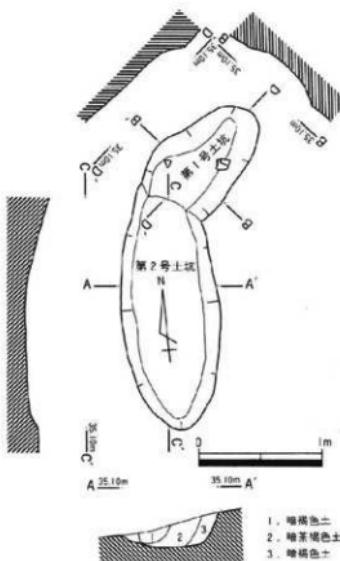
E-9区で検出された、平面隅丸長方形を呈する土坑で、長さ約1.5m、幅約1.2m、深さ約30cmを測る。長軸方位は、N-6°-Wをはかる。遺構の北端をSD5に切られている。

第6号土坑

E-11区で検出された、平面半円形を呈する土坑で、南北約1.2m、東西約60cmを測る。底面は、半円形の溝状を呈し、中央に径約30cmの落ち込みがある。遺構内には、上層に茶褐色土、下層に暗褐色土が堆積している。SD7に東半を切られている。

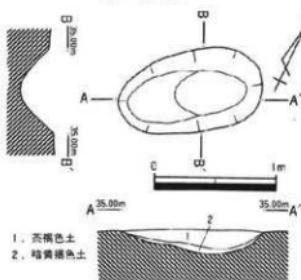
第7号土坑

D-12区で検出された平面楕円形を呈する土

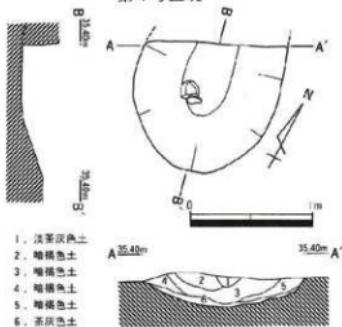


第29図 第1号土坑・第2号土坑実測図

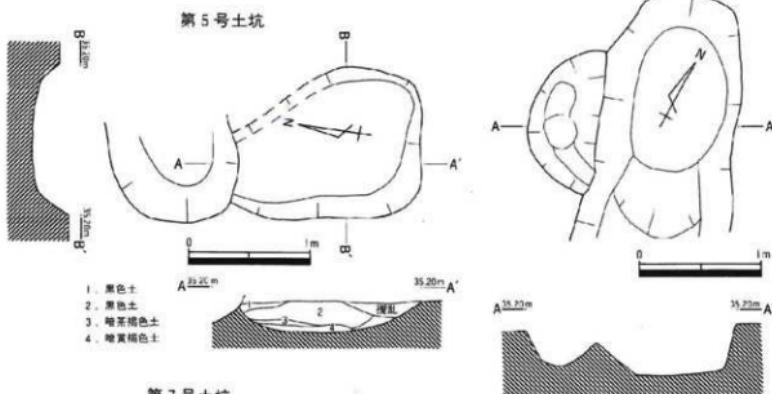
第3号土坑



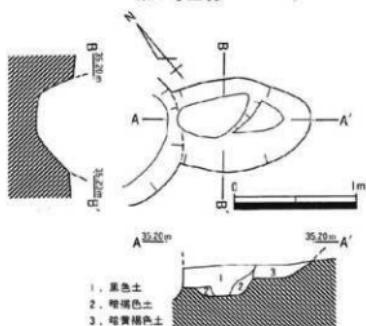
第4号土坑



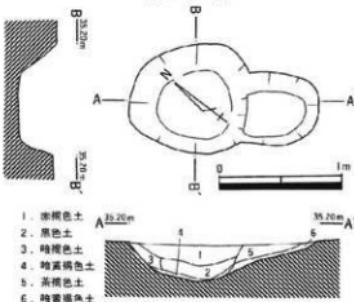
第6号土坑



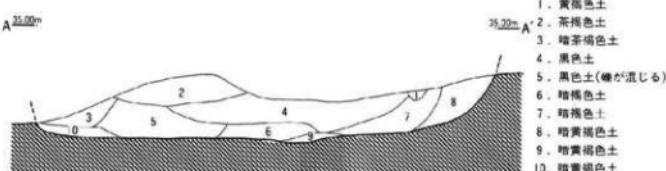
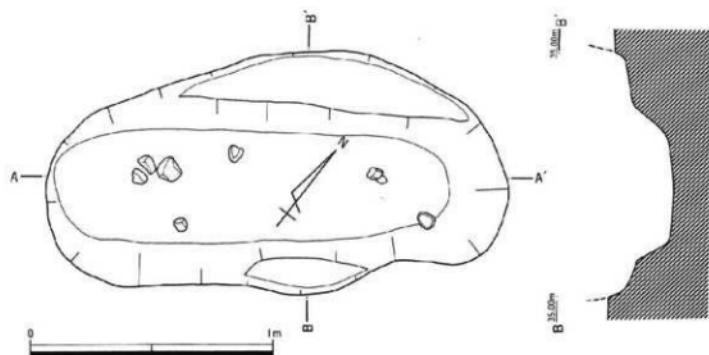
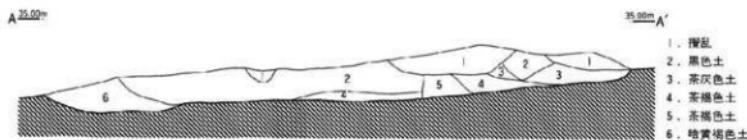
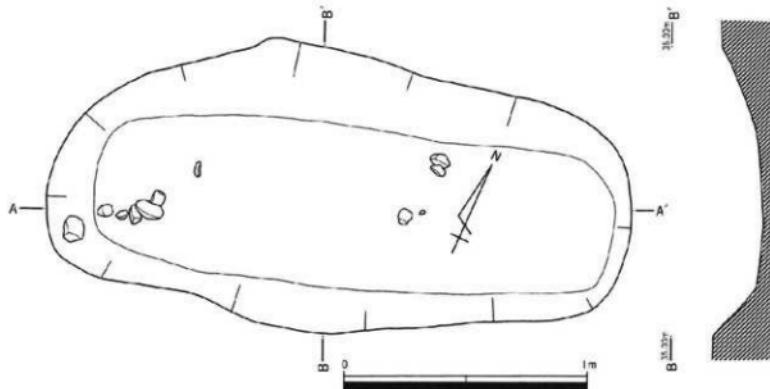
第7号土坑



第8号土坑



第30図 第3号土坑～第8号土坑実測図



第31図 第9号土坑(上)・第10号土坑(下)実測図

坑で、長径約1.1m、短径約80cmを測る。長軸方位は、N-55°Wをはかる。底面は、両端が浅く、中央が一段深くなり、最深約30cmを測る。遺構の西端はSD10に切られている。

第8号土坑

E-11区、第14号方形周溝墓の方台部で検出された。長径約1.5m、短径約90cm、深さ約30cmを測る。長軸方位は、N-31°30'Wをはかる。

第9号土坑

D-17区で検出された土坑で、丘陵の緩斜面に位置する。平面形は梢円形を呈し、長径約2.4m、短径約1.2mを測る。掘り方下場平面形は、長さ約21m、幅約70cmの隅丸長方形を呈する。長軸方位は、N-71°30'Eをはかる。遺構上面を削平されており、深さは約15cmを測る。底面は、西に向かって緩やかに傾斜しており、西端は、東端より約15cm低くなっている。

遺構底面に密着して、第34図-73の土器が出土している。

第10号土坑

D-18区で検出された。第9号土坑の北約2.8mのところに位置する。平面形は、長径約1.9m、短径約1mの梢円形を呈し、深さは約30cmを測る。掘り方下場平面形は、長径約1.6m、短径約45cmの隅丸長方形を呈する。長軸方位は、N-46°30'Eをはかる。

第11号土坑（第32図参照）

D-19で検出された土坑で、西半は、調査地区外に続く。調査地区内の長さ約1.7m、幅約1.1mの梢円形を呈し、最深約40cmを測る。長軸方位は、N-58°Eをはかる。

覆土中より、少量土器片が出土している。

この土坑の北側には、幅40~50cm、深さ約10cmを測る溝が接続しており、調査地区外まで続いている。

2. 古墳時代以降の遺構

古墳時代以降と考えられる遺構には、柱穴、道路状遺構等がある。

柱穴

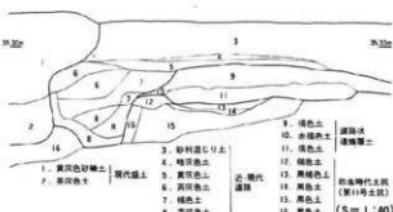
丘陵平坦面のD-15区以南で検出されている。とりわけ、第13号方形周溝墓の方台部、第14号方形周溝墓の方台部上で比較的まとまった形で検出されたが、掘立柱建物として抽出できるものではない。

時期については、柱穴内の出土遺物もほとんどなく、不明と言わざるをえない。

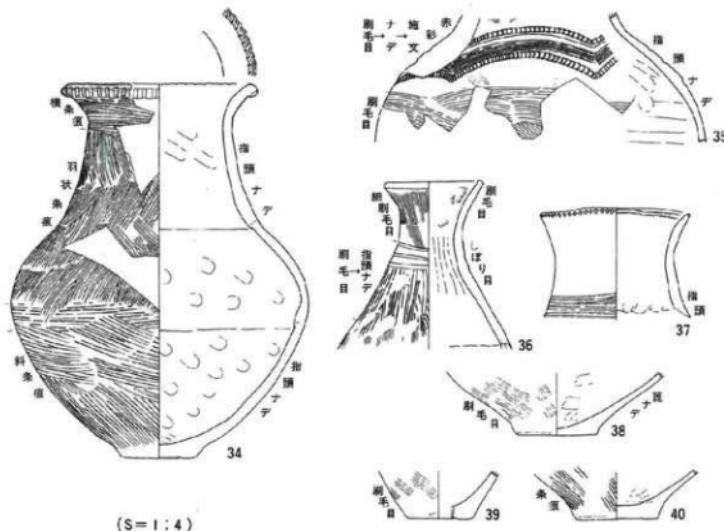
道路状遺構

D-17区から21区にかけて検出した遺構である。

現道下約60~70cm掘り下げたところで、弥生時代遺構の覆土である黒色土層を検出したが、この黒色土層の上面は、砂利が混じり固



第32図 道路状遺構断面図



第33図 出土土器実測図
34…SD10, SD41 35…SD41 36, 38, 39…SD35
37…第1号土坑 40…SD28

くしまっていた。

D-19区における土層断面観察（第32図）では、東西両端を土手状に残し、第11号土坑の覆土である黒色土・黒褐色土、地山の黄褐色土を削り、幅約1.5mの平坦面を造り出している。

覆土中より、須恵器の小破片が出土しているが、時期を断定できるほどの資料ではない。

第2節 遺 物

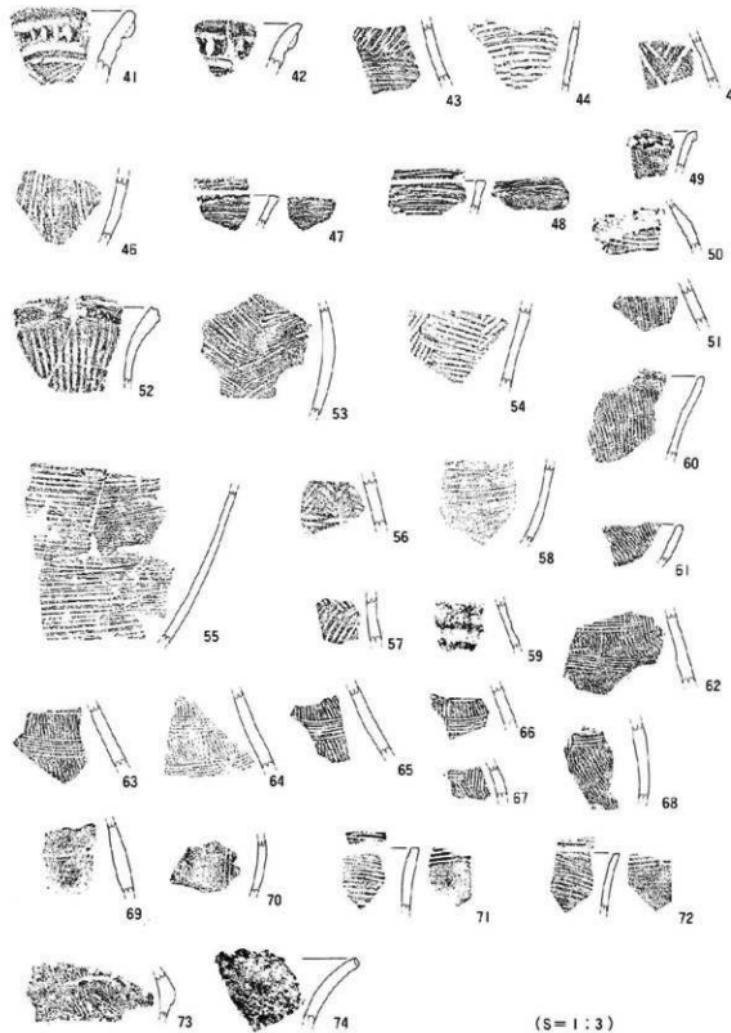
本調査にて出土した遺物は、方形周溝墓出土の弥生土器、少量の須恵器片、土師器片、土錠等があるが、本報告では方形周溝墓出土の弥生土器を中心として記述を進めていきたい。

1. S D 10出土土器（第33図34、第34図41～44、46～48）S D 41出土土器（第33図34、35）

今回報告するなかではもっともまとまった内容をもつ遺物である。また前述したごとく第33図34はSD10、SD41にまたがり出土しているため、35とともにまとめて報告したい。

34は折り返し状口縁を呈する広口壺である。口唇部は棒または半截竹管状工具によりキザミ目、その上面は条痕が施されている。頸部は広く作られ肩部はやや張るが胴部は球形に近く、底部は比較的小さく、上部底状を呈する。口縁から肩部にかけては、やや彫りの深い羽状条痕、胴部下半には彫りの浅い斜条痕を施している。

35は肩部の部分がほど現存する壺形土器の大形破片である。頸部はおそらく細頸で胴部は球形に



(S = 1 : 3)

41~44, 46~48...SD10 49...SD40 45...SD36 52, 53, 54...SD32

50, 51, 55...SD7 56~58...SD4 60~68...SD35 69...SD38 70...SD23

第34図 出土土器拓影図 71, 72...SD44 73...第9号土坑 74...第1号土坑 59...SD35

近いものとなろう。肩部文様は半截竹管状工具による沈線文、連続刺突文、櫛状工具による櫛描文を組み合わせ連弧状のモチーフを描いている。施文順位は櫛描文→沈線文、連続刺突文である。胸部下半は文様工具と同じ櫛状工具による刷毛目調整がなされている。なお頸部から肩部文様帶には赤彩がなされている。

41は口唇部下に隆起が貼付され半截竹管状工具によりキザミ目が施された壺形土器の口縁部である。

口縁部文様はおそらく繩文が施された後、半截竹管状工具による沈線文で三角形または複合縦斜状のモチーフを描くと思われる。42は41と同一個体の土器と思われる。

43は所謂はね上げ文が施された広口壺の頸部破片である。44も太い条痕が施された比較的薄手に作られた壺形土器の小破片である。47、48は同一個体で、口唇部端面を条痕に仕上げ小キザミ目を施した壺形土器の口縁部破片である。条痕は外面、口唇部内面に施されている。

2. S D 35出土土器（第33図36、38、39、第34図60～68）

36は口縁が小さく開き頸部は緩やかに広がる細頸壺である。胸部はおそらく球形に近くなると思われる。頸部から肩部文様は粗い刷毛目を施した後、一部ナデ消し、棒、箆状工具により横位に沈線を、三条下端の沈線に継ぎの沈線を二条三単位施している。口唇部端面は面が作られ口縁部には細かい刷毛目が施されている。39は上げ底気味の小さな底部で、色調から36と同一個体と思われる。

60～68は同一個体の拓影図である。60は小さく開いた口縁部で、形態は36に類似したものである。頸部から肩部文様は刷毛目調整を施した後、横位の櫛描文を数条施し、所々に継ぎの区画を施す。文様帶の刷毛目はナデ消されることなく、口縁部まで刷毛目調整を施している。比較的大きな底部をもつ38は刷毛目調整が施され、色調、胎土から60～68の底部と思われる。

3. その他の遺構出土土器（第33図37、第34図52～54、45、56、59、71～73）

第1号土坑出土の37は口唇部に小キザミ目の施された広口壺で、肩部に櫛描文が施されている。ほかに第1号土坑では口唇部端面を棒または指で押捺した壺形土器の口縁部破片が出土している。

ほかに、S D 32出土の52、53、54などは条痕仕上げの壺形土器であろう。S D 36出土の45 S D 4出土の56、S D 35の59などは半截竹管状工具、櫛描文を多用した細頸壺の破片であろう。

壺形土器はS D 44出土の71、72のような条痕仕上げで、口唇部端面、口唇部内面にまで条痕の施されたものがある。第9号土坑出土の73は刷毛目仕上げの壺形土器頸部片である。

第7章 遺構のまとめ

今回の調査では、方形周溝墓・土坑・柱穴列・上擴状掘込み・近世土擴墓・道路状遺構等を検出したが、本章では、弥生時代の方形周溝墓・土坑をとりあげまとめてみたい。

方形周溝墓

今回検出した17基（S D 45も方形周溝墓の周溝と考えられるため、基數に含めた）の方形周溝墓は、D-16～19に空白域（この部分に土坑群が存在する）が存在するものの、調査区のはば全域で検出された。以下、方形周溝墓の平面形・群構成・溝内埋葬の可能性の3点について整理する。

平面形

検出された方形周溝墓はすべて、周溝間が切れる陸橋部を有する形態をとるものであるが、12号・13号・14号では、溝間を浅い溝によって連結していた。この3基以外においては、方台部のコーナーをめぐる、このような浅い溝は確認できなかったが、後世の削平によりすでに消失してしまった可能性がある。

また、4本の周溝を有するタイプが大部分であるが、丘陵縁辺部に近い、14号・15号・16号は、4本の溝のうちの1本を欠く「コ」の字形を呈するものと思われる。14号は、調査区内において丘陵斜面の落ち際を検出しておらず、斜面側の周溝は確認されていない。15号・16号も方台部が斜面にまで続くものと考えられ、14号同様、「コ」の字形を呈するものと考えられる。

群構成

17基の方形周溝墓のうち、調査区南端で検出した8号・9号・10号、調査区北端で検出したS D 45（17号）は群構成を明らかにしえない状況にある。ここでは、発掘区中央に位置する1号～6号、11号～16号の12基を取り上げ、群構成について検討してみたい。

1号～6号、11号～16号の12基は、第1群—1号・5号、第2群—2号・11号・3号・4号・6号、第3群—12号～16号の3群に分類できる。これは、東西方向の溝（南溝と北溝にあたる）を共有しつつ、南北方向に展開する列を1群としてとらえたものである。

第1群（1号・5号）

1号方形周溝墓は、2号方形周溝墓との間に約50cmの間隔をおき、東側に位置するものであり、2号のグループとは別群を形成するものと思われる。しかし、5号については、遺構のなかで触れたよう、所属する群についての検討の余地を残すものである。

第2群（2号・11号・3号・4号・6号）

第4号方形周溝墓北溝（S D 11）と第6号方形周溝墓南溝（S D 16）が切合い関係をもつほかは、東西方向の溝（南溝と北溝にあたる）を共有するものである。この東西方向の溝を共有するという現象は、第3群の方形周溝墓間においてもみられる。

2号・3号・11号は、3基でS D 5を共有するものと思われる。1本の溝を3基の方形周溝墓が共有するケースは、今回の調査では、この3基だけである。

これは、1基分のスペースに、2号と11号の2基がはめこまれたためと考えられる。この根拠として、1-S D 30（11号西溝）が、S D 7（3号西溝）・S D 10（4号西溝）・S D 17（6号西溝）の延長線上に、S D 6（2号東溝）が、S D 9（3号東溝）・S D 12（4号東溝）の延長線上に位置する。2-したがって、3号方形周溝墓の東西溝間の距離（81m）と、11号方形周溝墓西溝（S D 30）と2号方形周溝墓東溝（S D 6）間の距離（8m）が等しくなる、の2点をあげる。

第2群の5基は、さらに小さな単位に分類可能である。

まず、6号は4号方形周溝墓の北溝を切って造られている。東溝は、2号・3号・4号の東溝の延長線上に位置しない。規模の点でも3号・4号より小さく、3号・4号とは別の単位と考えられる。

3号と4号は、SD8を共有する関係にあり、規模を同じくするものであり、1単位と考えられる。

そして、1基分のスペースに2基がはめこまれたと考えられる、2号と11号を1単位と考える。

第3群（12～16号）

丘陵の縁辺部に位置し、第2群の方形周溝墓群との間に約1m～1.5mの間隔をおく。

13号方形周溝墓は、斜面側に西溝を検出しており、4本の周溝をもつと考えられるが、14号～16号方形周溝墓は、「コ」の字形を呈すものと考えられる。

この群を構成する5基はすべて、東西方向の溝を共有する関係にあるが、12号～14号と15号・16号の2単位に分類できる。

12号～14号

12号東溝（SD33）・13号東溝（SD36）・14号東溝（SD39）は、確認面からの深さ約5cm～10cm程度の浅い溝で連結している。この浅い溝が、12号～14号方形周溝墓築造の際の基準ラインとなった可能性があることを指摘したい。

12号は、東西長において13号より1.6m短く、別の単位に属する可能性がある。

また、14号方形周溝墓の南溝と北溝の長軸方位の違いは、北溝が15号方形周溝墓の南溝を利用していることによると考えられ、14号は、15号よりも新しいと判断される。

15号・16号

15号と16号は、丘陵斜面に並び築かれており、規模を同じくするものであり、1単位と考えられる。
溝内埋葬の可能性

方形周溝墓の周溝のうち、SD6内に長さ170×幅60×深さ10cm、SD7内に120×80×10cm、SD8内に270×90×10cm、SD10内に120×80×10cm、SD41内に240×70×20cmのくぼみが溝底にあり、溝内埋葬の可能性をもつものである。

土坑

11基の土坑を検出したが、これらは平面形により、A一小形で円形・椭円形を呈するもの（1号～4号、6号～8号）、B一大形で隅丸長方形に近い形状を呈するもの（5号、9号～11号）、の2種類に分類できる。

Aタイプは、12区以南に散在する傾向にあり、Bタイプは、5号を除き、17区～19区にかけて約2.8mの間隔をおき、斜面に直交するかたちで並ぶものである。

これらの土坑のうち、9号・11号より土器片が出土している以外は、遺物の出土がなく土坑の性格等不明と言わざるをえないが、Bタイプとしたものは、規模より人間を埋葬することが可能であり、土壙墓の可能性をもつものである。

今まで述べてきたことを再整理すると、次の5点に要約できる。

- 1 発掘区の中央に位置する方形周溝墓群は、東西方向の溝の共有関係から3群に分類できる。
- 2 1群はさらに、同程度の規模をもつ方形周溝墓の単位（2基～3基）に分類可能である。
- 3 3群は、ともに平行しながら南北方向に展開している。
- 4 土壙墓と考えられる土坑（9号～11号）は、方形周溝墓群の間（12号～16号の1群と17号の属する群）の空間に並ぶ。
- 5 方形周溝墓が築造される以前に、土坑（5号・6号・7号土坑）が存在した。

第8章 遺物のまとめ

本調査にてもっとも注目される遺物は少量ではあったが、方形周溝墓出土の弥生土器である。この弥生土器は若干の時間幅が考えられ、以下その編年的位置について述べてみたい。

I 群土器

2、3号方形周溝墓（S D 5、6）を中心とし、一部4号方形周溝墓（S D 10）も含む資料である。
壺形土器

口縁部A類（第14図13、14 第34図52） 大きく外反する単純口縁で、外面を条痕仕上げする広口壺口縁である。口唇部端面を横方向に条痕仕上げする13、52と紙に行う4などがある。

口縁部B類（第14図19） 口縁を曲折させる広口壺である。外面は曲折部に半截竹管状工具によるキザミ目が施され、曲折部上面には波状になると思われる粘土帯が貼付されている。外面には半截竹管状工具による刺突文が施され、内面文様はない。

肩部模様（第14図9～12、17、20） 棒や半截竹管状工具による条痕文の施された9、10、17と、櫛齒状工具による横線、波状文を施文する11、12、20などがある。

壺形土器（第14図15、16） 横羽状条痕仕上げで、外面口唇部にキザミ目が施されたものである。

II 群土器

1号方形周溝墓（S D 2）、4号方形周溝墓（S D 10、12）、5号方形周溝墓（S D 15）、6号方形周溝墓（S D 17）、15号方形周溝墓（S D 41）などを中心とし、今回報告するなかではもっともまとまったもので、方形周溝墓として主体をなす時期であろう。

壺形土器

A類（第13図3～5、第15図21、第15図34、35） 口縁が小さく外反する単純口縁の細頸壺である。肩部は球状に近くなり、文様は頸部から肩部にかけて半截竹管状工具による沈線文、連続刺突文が施文される。文様のモチーフは35の櫛描文との組み合わせにより連弧状にするもの、波状にする21、頸部に連続刺突を行い沈線文で区画する21、横沈線文のみの3～5、半截竹管状工具による大型の列点文の施された5などがある。調整はミガキ、胴部下半に刷毛目調整が施される5、35、地文として条痕を残す3、21などのバラエティがある。他に46、56、59のような箆描の複合鋸齒文のみられるものがある。

B類（第13図6） 口縁を曲折させるもので、曲折部、口唇部にキザミ目を施す広口壺である。曲折部上面には沈線文を波状に施し、モチーフ、施文具ともA類と関連性が深い。

C類（第13図1、2、34） 口縁を折り返し状に肥厚させ棒または半截竹管状工具にてキザミ目を施す条痕仕上げの広口壺である。条痕は口縁から肩部にかけて横羽状に施される34、横、縱位方向に施される1がある。胴部下半はどちらも浅い斜条痕となり、おそらく口縁から肩部の条痕は文様となる可能性が高い。2は口縁が欠損しているか、細横羽状条痕仕上げの小壺で本類に含まれる。

D類（第15図22、25 第34図41、42） A～C類以外の器形不明であるものを本類とした。22は頸部にてゆるやかに曲折した壺形土器である。文様工具、複合鋸齒状のモチーフからA類かB類に関連したものであろう。25は格子目文の施されたもので、Ⅲ群土器または天竜川以西の土器との関連性のあるものであろうか。

41、42は口唇部に隆帶のある土器で、純文を複合鋸齒状に区画する広口壺の口縁部である。

壺形土器（第15図28～30） 少量であるが第6号方形周溝墓出土の、横羽状条痕仕上げで、口唇部

外面にキザミ目を施すものがある。

■群土器

13号方形周溝墓（S D35）、第1号土坑出土の資料を中心とするものである。

壺形土器

A類（第33図36、第34図60～68） 小さく外反する単純口縁の細頸壺である。棒または箆状工具により沈線文の施された36、数条の櫛描横線文の所々に縦区画を入れる60～68の文様がある。調整は刷毛目調整が主体となり、文様帶の刷毛目は若干ナデ消されている36、まったく消されない60～68などが見られる。

B類（第33図37） やや外反した広口壺である。口唇部には小キザミ目、内面には櫛描文、肩部には櫛描横線文を施したものと思われる。

壺形土器（第34図74） 棒で押捺したような大きなキザミ目を口唇部端面に施した、刷毛目ないし細条痕仕上げのものである。

以上Ⅰ～Ⅲ群に分類してみた。以下それぞれの編年的位置を考えてみよう。

Ⅰ群土器は条痕仕上げの壺形土器が主体となり、肩部に櫛描文を施すものを含んでいることから、丸子式に近いものが考えられる。⁽¹⁾しかし、口縁部B類、はね上げ文など從来知られている丸子式の範疇にない要素もみられ、三河の岩滑式との関連性も考えられ、丸子式自体の型式内容の再考を提起する資料となりえよう。

Ⅱ群土器は、半截竹管状工具による連続刺突文、沈線文の施された細頸壺（A類）を主体とするもので、從来知られている資料の中では嶺田式と考えられる。嶺田式土器は久永氏により命名された中東遠地域に分布する中期中葉の土器型式名である。⁽²⁾ A類の主たる文様構成、器形は從来知られているごとく長野県伊那谷に分布する阿島式、岐阜県に分布する島崎Y式（仮称）⁽³⁾に類似している。器種等では関東に分布する須和田式に類似するが文様構成で異なる。⁽⁴⁾

B類土器は棟原町西川のものに類似する。西川のものはゆるやかに曲折するが、B類土器は鋭く曲折しむしろ瓜郷式に近いものである。⁽⁵⁾文様構成では明らかに嶺田式であろう。B類の系譜についてはⅠ群土器口縁部B類に求められ、三河に分布する瓜郷式広口壺との関連が考えられる。

さてC類の条痕仕上げの広口壺であるが從来の嶺田式の範疇にはないものである。条痕の施し方、器形などは前段階の丸子式とは異なるため嶺田式の中に含まれるものである。系譜についてはやはり丸子式の中にある口唇部に隆帯の貼付される広口壺に求められよう。またD類に含めた41、42の系譜も同様に求められるが、文様は繩文が施されるなど嶺田式の範疇のものである。

要については資料が少なかったが、横羽状条痕で口唇部にキザミ目の施されるものが知られた。

Ⅲ群土器はA類などに見られる櫛描文から白岩式に類似するものである。しかし從来知られている白岩式の細頸壺の形態とは異なり、むしろⅡ群土器の細頸壺（A類）に近い。文様も箆状工具による沈線文を施す点や文様帶の刷毛目を残す点など、從来の白岩式の中に見られないものがあり、本資料は白岩式の中でも古い様相をもつものと考えたいが、資料不足の感はぬぐえないものがある。

以上のように紙面の都合、筆者の認識不足のため十分分析しえなかった点もあるが、從来あまり良く知られていないかった中東遠地域の弥生中期に編年された丸子式、嶺田式、白岩式について重要な問題を提起したと思う。特に嶺田式については当地方の方形周溝墓成立の問題とともに興味深い資料を提示したことで注目されよう。

第9章 総括

今回の調査では、弥生時代の方形周溝墓17基・土坑11基・近世土壙墓1基、時期不明であるが上塙状掘込み2基、柱穴列、道路状遺構を検出した。ここでは、調査の中心となった方形周溝墓に的をしづり、他遺跡と比較しながら時期設定を行いたい。

上述したように今回確認した弥生時代の葬制に係る遺構は、方形周溝墓17基、土壙墓の可能性のあるものとして土坑3基（9～11号）並びに周溝内凹部分（SD4、SD6、SD7、SD8、SD10、SD41）等が考えられる。そしてこれら遺構のあり方は、生活跡である当該時期の住居跡を伴わないことから①居住域とは別に墓域が形成されている。第7章遺構でも述べているように、②方形周溝墓17基は大きく3群にされること。4号・13号で検出しているように、③方形周溝墓1基に対し主体部1基で構成されること（これについては、方台部上が耕作により大きく削平されており疑問視されるものであるが、13号方台部上は比較的安定した検出状況を示している）。④方形周溝墓とは別埋葬形態である土壙墓と考えられる土坑が方形周溝墓周辺に存在している（13号・14号方台部上に存在するものもあるが、12号～14号が南北方位に連続して形成されていることから13号方台部上の土坑が13号に、14号方台部上に形成される土坑が14号に付随するものかは明らかではない）。成勝土遺跡等における土壙墓のあり方から、⑤SD4、SD6、SD7、SD8、SD10、SD41にみられる凹部には周溝内埋葬が考えられ土壙墓の可能性がある。⑥他の埋葬形態として土器棺墓があるが今回の調査区では検出しなかった。以上が今回の調査で得られた当該期遺構のあり方である。

ここで県内外の遺跡のあり方を観てみたい。県内において当該期の方形周溝墓を検出した遺跡は、磐田市馬坂遺跡、本遺跡検出の方形周溝墓よりやや新しい時期のものとしては、同じく馬坂遺跡・袋井市掛ノ上（狐塚）遺跡があげられる程度である。それらの様相は、調査自体が遺跡の部分的調査あるいは群構成の把握が成されていない等により、今までのところ当該期における墓制については明らかとなっていない。県外では、滋賀県守山市服部遺跡、愛知県西春日井郡朝日遺跡等、やや新しい時期のものとして神奈川県横浜市成勝土遺跡等が知られている。このうち朝日遺跡では、198基の方形周溝墓が検出されている（当該期併行期とされる朝日式期では43基、目田町式期では50基を数える）。これらは、居住域の外縁に分布しており墓域を形成している。各墓域では多数の方形周溝墓と若干の土壙墓が存在しており、両者は分離せず混在状態にあることである。この様相は先にあげた本遺跡様相④・⑤と同様である。この他、時期的にやや新しい方形周溝墓群として、成勝土遺跡から12基以上の方形周溝墓（宮ノ台式期のものである）が、報告されている。これらは、墓域内に存在するものであり、7群に群別が可能である。そして各方形周溝墓は1基につき1つの主体部をもち、方形周溝墓とは別に壺棺墓、土壙墓、周溝内土壙墓の存在が知られている。これらの特徴は、山下遺跡でも言えることであり、上述の①～⑥がそれぞれに共通することである。

次に遺物の出土状況とりわけ土器の出土状況についてふれてみる。出土土器の多くは小破片で完形土器ならびに準完形土器は第13図1～6、第15図21、22、第33図34、35である。これらの出土状況はいずれも方形周溝墓周溝からの出土であり、覆土上層中から下層にかけて出土したものである。遺構の時期設定をする際多くの場合土器が使用される。この場合小破片1点のみが遺構からの出土品である時、これを直接的に時期決定の判断基準として使用することができない。幸いにも本遺跡における出土品は、小破片の他に上述の大形破片土器・完形土器の出土が得られた。これらの土器型式は、第8章 遺物のまとめにおいても述べているとおり弥生時代中期嵐田式土器に比定されるものである。

したがって今回の調査で確認された方形周溝墓のはほとんどは弥生時代中期嶺田式期のものであると判断してさしつかえないものと思われる。

以上述べてきたように該期における遺跡（生活跡・墓跡共に）について検出例が比較的少なく参考となるべき資料に乏しいのが現状である。したがって本書では、充分でないが資料紹介として報告させていただいた。今後の調査類例と併せて活用していただければ幸いである。

最後になったが、調査ならびに報告書作成にあたって次の方々に御教示・御指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。

加藤賢二、佐藤由起男、篠原修二、柴田稔、鈴木敏則、中嶋郁夫（敬称略）

第8章 参考文献

- (1)a 杉原莊介 1962 「駿河丸子及び佐渡出土の弥生土器に就いて」『考古学集刊』第4冊 東京考古学会
b 杉原・大塚・小林 1967 「東京都（新島）田原における縄文弥生時代の遺跡」『考古学集刊』第3巻No.3 東京考古学会
c 佐藤由起男 1983 「東海地方東部における畿内第Ⅰ様式 第Ⅱ様式に並行する土器編年について」『第4回三県シンポジウム東日本における黎明期の弥生土器』群馬県考古学講話会他
- (2) 立松宏 1968 「岩滑遺跡」『半田市誌』 資料篇I 半田市誌編さん委員会
- (3) 久永春男 1955 「東海」『日本考古学講座』4 河出書房
- (4) 佐藤・宮沢 1967 「喬木村阿鳥遺跡」『長野県考古学会誌』第4号 長野県考古学会
- (5) 増子康真 1975 「美濃における弥生中期について」『古代人』31 名古屋考古学会
- (6)a 杉原莊介 1967 「下絶須和田出土の弥生式土器に就いて」『考古学集刊』第3巻No.3
b 杉原・大塚 1974 「千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群」『明治大学文学部研究報告』考古学第4冊
c 杉原莊介 1981 「栃木県出流原における弥生時代中期の再葬墓群」『明治大学文学部研究報告』考古学第8冊
- (7) 向坂綱二 1978 「榛原郡榛原町西川出土の嶺田式土器」『静岡県考古学研究』1 静岡県考古学会
- (8) 久永春男他 1963 『瓜郷』 豊橋市教育委員会
- (9)a 田辺昭三 1972 「白岩下流遺跡報告」再版 森町考古学研究会
b 市原寿文 1966 「静岡県小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査概報」「埋蔵文化財調査報告」 静岡県教育委員会 日本道路公団
c 柴田稔 1983 「袋井市域への弥生文化の伝播」『袋井市史通史編』袋井市史編纂委員会

第9章 参考文献

- (1) 久永春男他 1963 『瓜郷』 豊橋市教育委員会
- (2) 鈴木敏弘他 1974 「原始墓制研究2 方形周溝墓研究その2」「研究史編」上 原始墓制研究会
- (3) 山岸良二他 1976 「原始墓制研究4 方形周溝墓研究その4」「研究史編」中部日本 原始墓制研究会
- (4) 鈴木敏弘他 1977 「原始墓制研究5 方形周溝墓研究その5」「研究史編」東日本 原始

墓制研究会

- (5) 小宮恒雄他 1975 『歳勝土遺跡』 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告V 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- (6) 倉田芳郎編 1978 『千葉・南總中学遺跡』先史10 駒沢大学考古学研究室
- (7) 向坂鋼二他 1978 『静岡県における4~5世紀の墳墓について 地方の古墳の成立をめぐって』 静岡県考古学会シンポジウム1 静岡県考古学会
- (8) 1979 『服部遺跡発掘調査概報』 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会
- (9) 柴田稔他 1980 『新豊院山遺跡(A-2・3地点) 磐田市竹之内土石採取計画地内遺跡確認調査報告書』 磐田市教育委員会
- (10) 山岸良二 1981 『方形周溝墓』 考古学ライブリー8 ニュー・サイエンス社
- (11) 加藤安信他 1982 『朝日遺跡』 愛知県教育委員会

図 版

図版 I



道路通景（航空写真）

図版 II



調査区全景 調査前（北から）



調査区全景 完備状況（北から）

図版 III



第1号・第2号・第11号方形周溝墓
完掘状況（北から）



第3号方形周溝墓 完掘状況（北から）



第4号方形周溝墓 完掘状況（南から）

図版 IV



第5号方形周溝墓 完掘状況
(北東から)



第6号方形周溝墓 完掘状況 (南から)



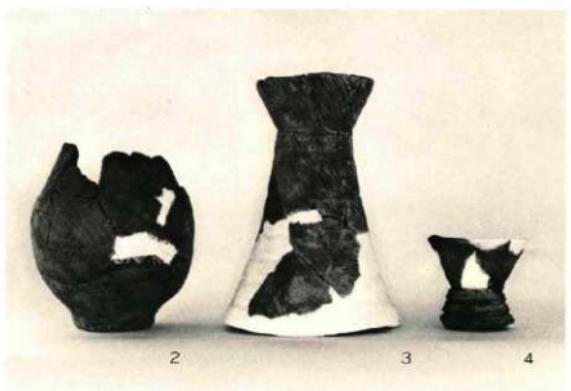
近世土壙墓

図版 V

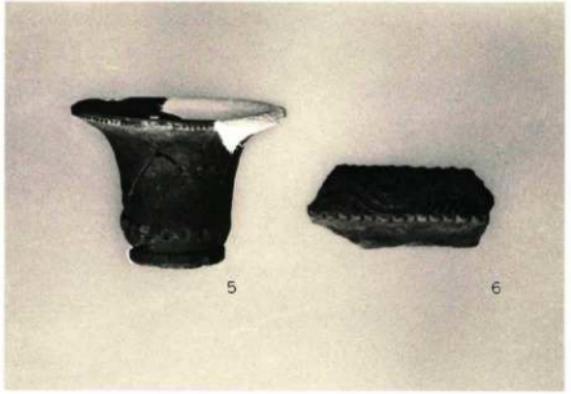
第1号方形周溝墓 出土土器



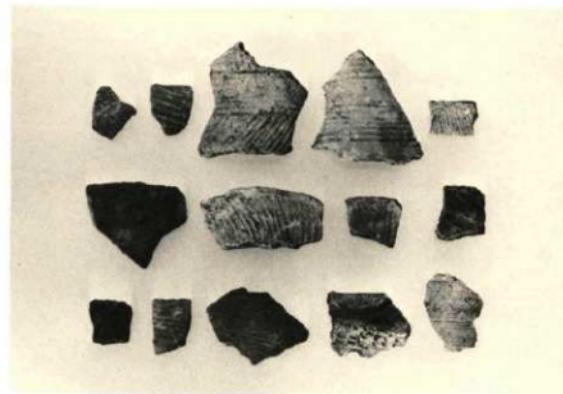
第4号方形周溝墓 出土土器



第5号(左)・第5号(右) 出土土器



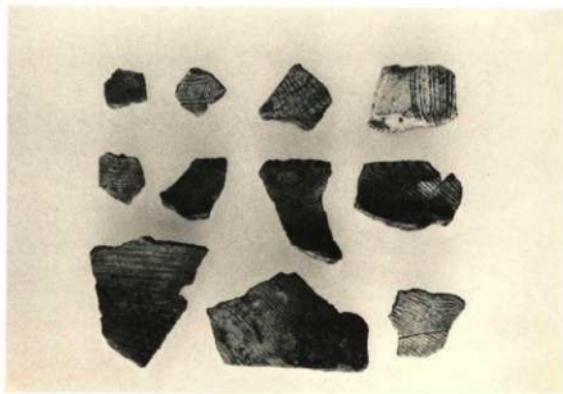
図版 VI



第1～3号方形周溝墓 出土土器



第4号方形周溝墓 出土土器



第4～6号方形周溝墓 出土土器

図版 VII

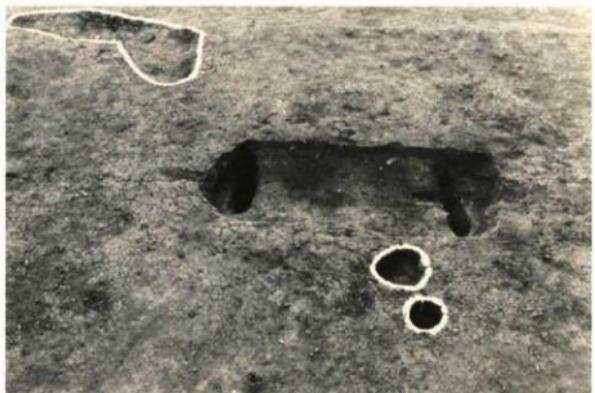
第8号方形周溝墓～
第10号方形周溝墓 完掘状況
(北より)



第13号方形周溝墓 完掘状況
(北より)



第13号方形周溝墓 主体部
(東より)



圖版 VIII



第14号方形周溝墓 完掘状况

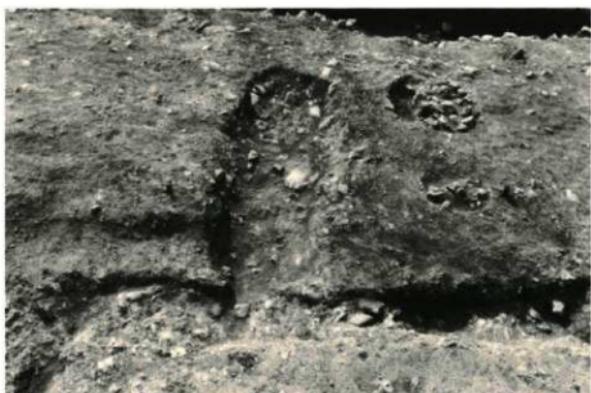


第15号方形周溝墓・第16号
方形周溝墓 完掘状况

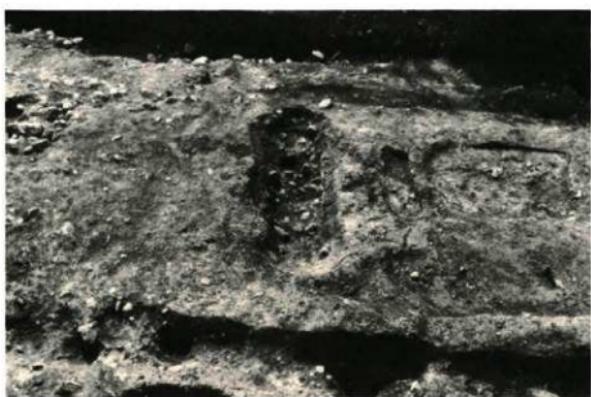


第9号土坑(奥)・第10号土坑(中央)
第11号土坑(手前) 完掘状况

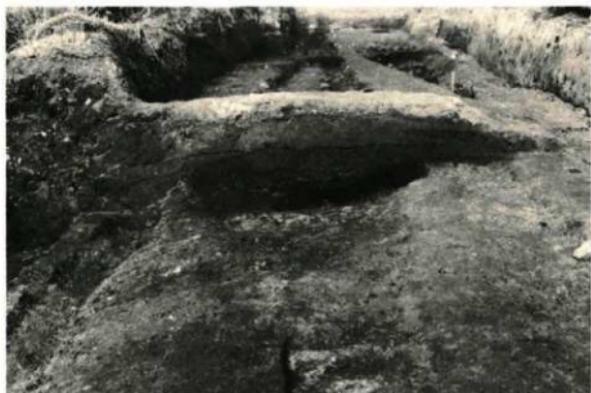
図版 IX



第9号土坑（東より）



第10号土坑（東より）



道路状遺構 土層断面（南より）

図版 X



形周溝基群遠景(北より)
墓より12号・13号・14号・
5号・16号

出土土器



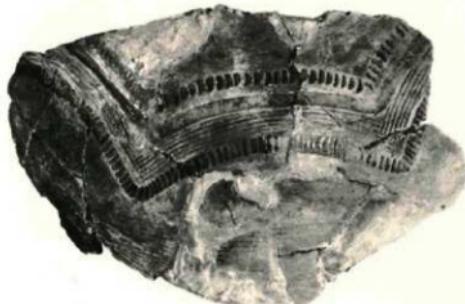
37



36



34



35

山下遺跡

昭和 59 年 3 月 30 日

編集行 拼川市教育委員会
発行 袋井市教育委員会

印刷 株式会社 三 剣
静岡市豊田 3-5-30
TEL (0542) 82-4031

